みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Architectural Space and the Form of Sacred Groves in the Southwestern Islands

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浦山, 隆一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003780

南西諸島の聖域における建築的空間と形態

浦　山　隆　一*

はじめに
1. 聖域事例
1) 沖縄の御嶽
2) 宮古の御嶽
3) 八重山の御嶽
2. 聖域の地域的類型分析
1) 沖縄の御嶽形態
2) 宮古の御嶽形態
3) 八重山の御嶽形態
むすび

は　じ　め　に

沖縄の島々のセジ（sizi　霊力）の信仰は，非人格的な神秘的・超自然力とされ，もっともプリミティブなものである。こうしたセジの憑依する聖別された場所は，中世以後，首里玉府によって御嶽 (ʔutaki) と総称されてきた。

御嶽は沖縄ではウガミとかウガン，ウガンジュ，ムイ，ヤマ，グスク，宮古ではスクとかヤマ，ムィ，ムトゥ，八重山ではヤマとかハル，オン，ワー，ウガン，スクなどと呼ばれている。ちなみに，御嶽の総数は『琉球国由来記』によると902ヵ所にも及ぶ[1)]。

仲松弥秀によれば，御嶽の神は祖霊神・島立神・島守神の系列とニライ・カナイ神，航海守護神に関係する系列とに二分出来るという。御嶽の地理的位置も祖霊神系とニライ・カナイ系では異なっていて，祖霊神系御嶽は村落の立地する斜面の最高部か山の中腹部にあり，村落の宗家（根屋）やノロ殿地の背後に位置する。それに対して，ニライ・カナイ系御嶽は，海洋を広く望見出来る山項・岬端上・浜辺もしくは村落の小島に設けられている。また，御嶽は機能的性格上，本御嶽と通うし御嶽とに区分される。通うし御嶽とは，本御嶽の神を招請して作為的に創設されたもので，本御嶽の場所に向って遙拝するための御嶽である [仲松　1975: 15–22, 65–74; 1983b:131]。

* 香川職業訓練短期大学校，国立民族学博物館研究協力者

1) 仲松が提示した『琉球国由来記』に記載されている御嶽総数は902ヵ所であるが [仲松　1983a: 294]，鳥越が捨い出した総数は901か所で [鳥越　1965：129]，両者の報告には若干の違いがある。

御嶽はこれまで集落の信仰習俗や祭祀との関係で取り上げられてきたが，その形態や空間構成について詳しく述べられたことはなかった[2]。仮に聖域が神とのかかわりのなかで意識化され，秩序をもつとすれば，聖域の形態的構造や空間的特質の問題は重要な意味をもつ。

本稿は，筆者らが種々の研究助成[3]を受けて，1979年から1985年にわたっておこなった聖域の現地実測調査資料（御嶽調査件数138，祭祀家屋調査件数53）に基づいて，聖域の建築的空間と形態を構成する要素の実体を明らかにするとともに，御嶽の地域別・類型別分析をとおして，聖域における祭祀空間の建築的構造を考察することを目的とする。

なお本稿では，調査事例のなかから20事例を取上げ，それぞれの御嶽の現況と空間的特質を中心に記述する。また，依代や香炉，小祠を含むイビの形態と領域，祭祀家屋のある広場の構成，イビと広場との関係を空間構成軸概念で捉え，御嶽の領域区分の分節度ならびに建築的平面構成の基準とは何かについて検討する。

1. 聖　域　事　例

御嶽の建築的形態調査に関して，その基礎資料となる同一縮尺の配置・平面図の作成に必要な空間領域決定要素や高低差による分節度，方位としての拝む方向を調査対象とした。また実測にあたって御嶽の位置の確認や御嶽全域踏査を行なうほか，イビ内の依代や香炉，小祠の位置と個数，イビと広場との分節方式および領域標示の形式，拝殿の有無，拝殿の形態などを確認した。さらに平面的形態を構成する基軸[4]を選び出し，それに基づいて領域別の実測を行なった。詳細な事項としては注連縄や立石，植生，地盤面の高低差も含めて測定した。

1）沖縄の御嶽

沖縄本島およびその周辺島の御嶽には，巨岩や洞窟，霊石，神木などに香炉が供えてある単純な形式の御嶽から，イビのまわりを低い石垣で楕円形に囲み，その入口の

2）御嶽の信仰習俗や形態については，沖縄県教育委員会［1978, 1979, 1980, 1981, 1984, 1985］や名護市教育委員会［1979］によって報告されている。

3）1980年度日本建築学会九州支部研究助成による「沖縄の祭祀家屋に関する研究」および1982年度文部省科学研究費奨励研究（B）「南西諸島における御嶽の建築的形態と空間に関する研究」，1983年度トヨタ財団第2種研究「南西諸島の聖域における宗教空間の研究」。

4）基軸とは，聖域を構成している基本的構成軸のことで，本稿では，鳥居，広場，拝殿，イビの入口の石積み入門，イビの香炉を見通す線を基準とし，そのつど現地において決定した。この線の設定によって，実測における配置関係が位置づけられる。

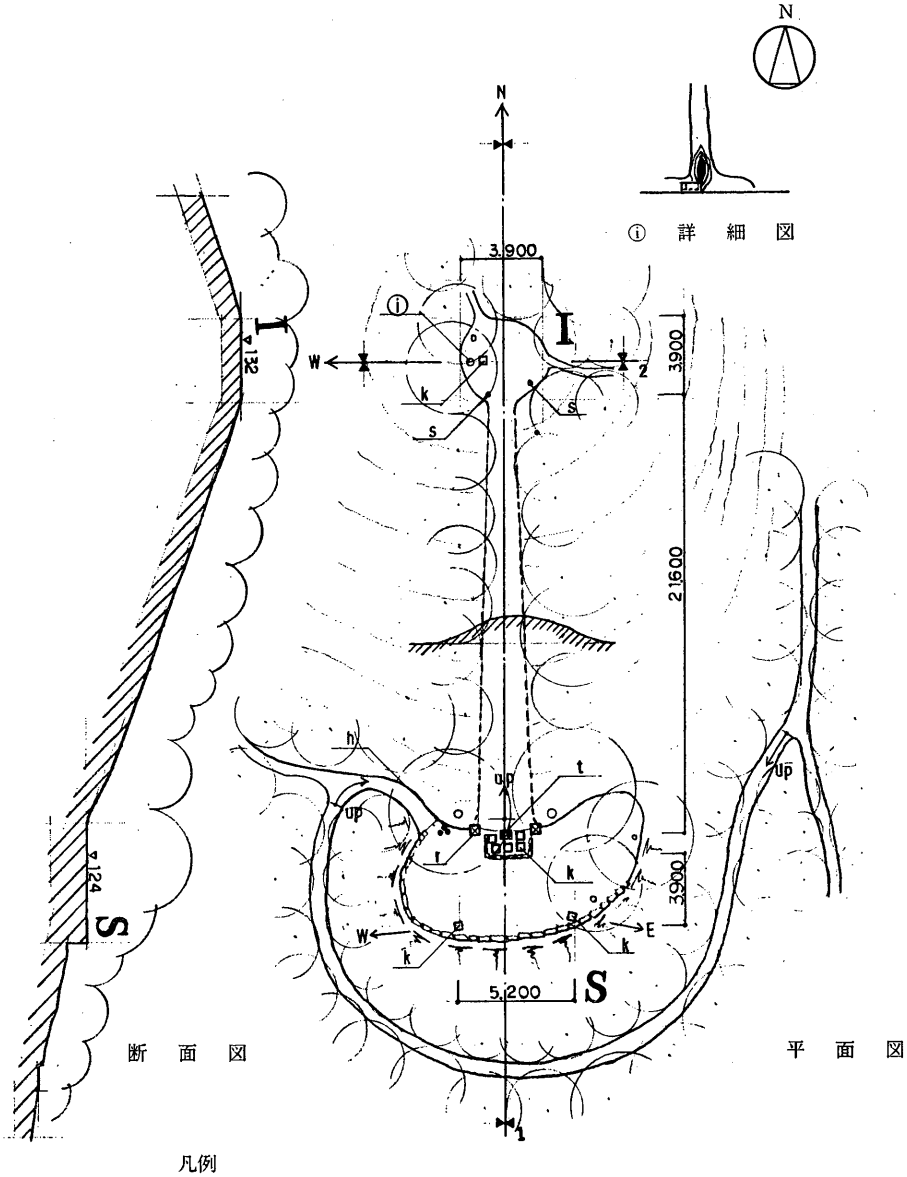
石門の前面に香炉を置いた形式のものまで種々の形が存在する。ここでは，沖縄本島北部地域の地形や自然環境に適合させて形成された御嶽（6事例）を中心に，聖地の人工化に伴う首里地域の御嶽（2事例）および御嶽登りにみられる山項形式の御嶽の例として慶良間群島の御嶽（2事例）を取上げる。

事例1　ウガミ　（所在地：国頭村字辺戸）

辺戸部落は沖縄本島北端に位置する集落である。部落のもっとも高い位置に祭場の神アサギと広場がある。また部落には，『中山世鑑』(1650) にも記載されている安須森御嶽とシチャラ嶽という二つのウガミがある。調査はシチャラ嶽を対象とした。

シチャラ嶽は部落の南側に位置する。神アサギの広場を旧道に沿って南側に進むと，西側に時計回りに参道があり，西からイビの前に達する。イビの前広場は等高線に沿って展開し，3カ所に香炉が置かれている。そのうちの2カ所は広場の南端に西と東の方向にむいて，それぞれ香炉が1個置かれている。他の1カ所は，イビの丘の方向の2個の燈籠の間に香炉群として置かれる。また香炉の背後に梵字を刻んだ石碑がある。なおイビの前の入口の山際には火の神が一体置かれる。イビの前広場からイビへの進入路は丘が盛上がり，高低差は約8m程で，二つの領域は視覚的に区分される。丘を登りつめた所は約4m程の円形の広場で，広場の西端の西方向（安須森方向）にイベ木と香炉がある。さらに広場の南端に線香が2ヵ所置かれている。イビとイビの前とは南北軸で構成され，それに対してイビを拝む方向は直交する軸を取る。この御嶽には建築物は一切なく，進入形式やイビとノビの前との空間分節，方位軸構成の点で変化に富んでいる。

写真1　辺戸のウガミ，シチャラ嶽のイビヌメー広場北向きの香炉と燈籠。



凡例

I：イビ，S：広場

h：火の神，k：香炉，i：イビ木，r：燈籠，s：香炉，t：石碑

図1　ウ　ガ　ミ

事例 2　イビヌタキ　（所在地：国頭村字比地）

イビヌタキはびんの嶽とも呼ばれ，現在の比地部落から約 1 km 比地川上流のウチバラと称する所にある。この拝所一帯はハミジョーマとも呼ばれ，神のいます所とさ

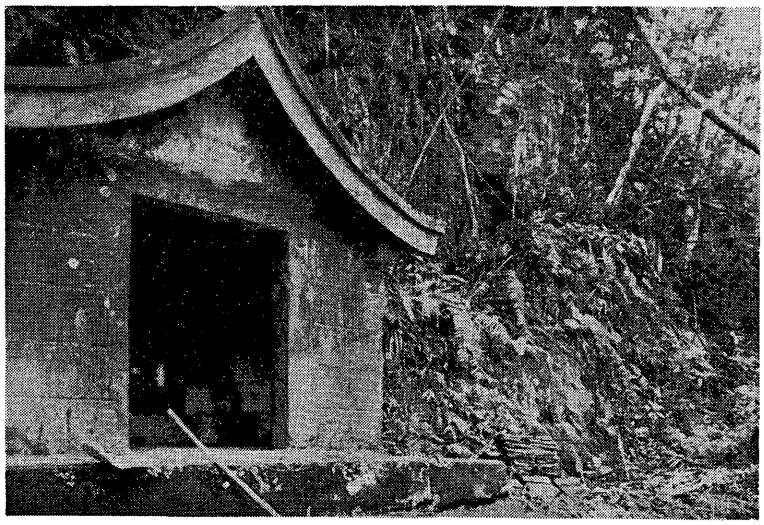


写真2　イビヌタキの切り立った岸壁中腹にあるイベ岩に接して設けられた小祠。

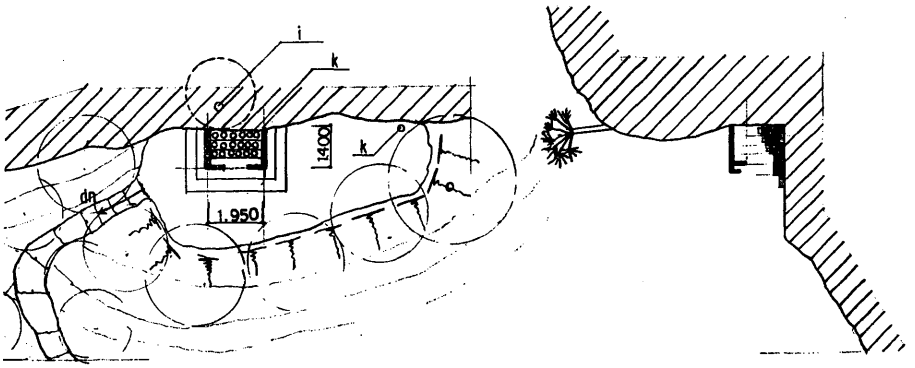
れる。

この聖域は比地川を挟んで，イビ領域と「中の宮（ミヤ）」を含む拝所に二分されている。「中の宮」はイビへの遙拝所で，手前にはピヌカンヤー（火の神）と拝井がある。拝殿はコンクリートの流れ造りの平入り形式で，内部には香炉が12個置かれている。遙拝と参道の軸線は南東―北西軸である。遙拝所から比地川へは軸線と直角方向南に窪んだ小道が続いて川へ向かう。その川の対岸にイビへの参道がある。イビは比地川南岸の切り立った岸壁の中腹にある。イビには間口約2m，奥行約1.5mのコンクリートブロック造りの小祠が岩に接して建てられ，奥の壁面は岩のままで，岩がイベ岩であることを示している。内部は床が3段になっていて，18個の石香炉が6個づつ置かれている。その他，小祠の西側に岩に向って香炉が1個置かれている。このイビの形式は磐座を思わせ，岩の上部の蒲葵は視覚的垂直性を強調している。イビヌタキの「中の宮」を含む聖域は，直交する2本の基軸の中心に「中の宮」を位置させ，イビと遙拝所とが領域区分を意味する分節要素（川）によって区分され，高低差において垂直性が強調された御嶽といえる。

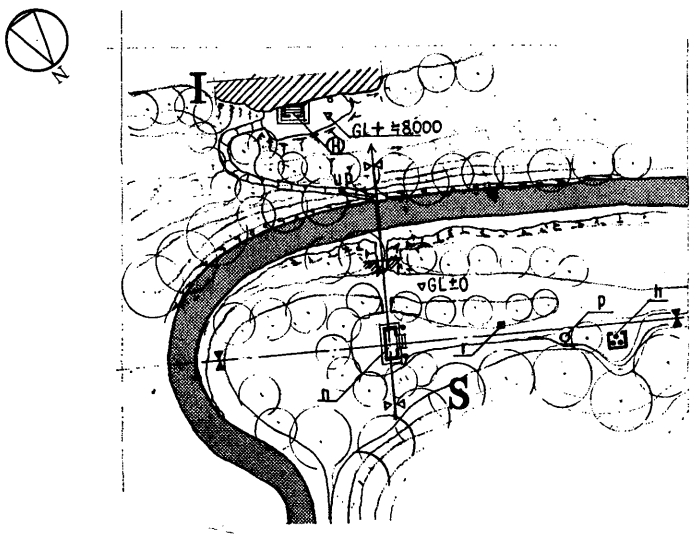
事例3　ヌーガミ　（所在地：国頭村字安波）

安波部落は安波川と普久川の合流地に，南側のソウジヤマを背に展開する山原の典型的な集落である。

ヌーガミあるいはウガミと呼ばれる拝所は，部落対岸の安波大橋・御拝橋を越えた山の中腹にあり，聖域は川によってその領域が明確に区分されている。この御嶽はヤ



Ⓗ　詳　細　図　　断　面　図



配　置　図

図2　イ　ビ　ヌ　タ　キ

ギナハモリ城ともよばれ，入口にはコンクリート製の鳥居がある。高低差約17m の階段参道を登ると広場がある。その広場は高さによって三つに分けられている。御嶽の拝殿の前面に，安波に最も早く住みついたとされる，浦添の安波茶から来た人の遺骨を納めた高さ1.2m の角型の石積みがある。拝殿は2.7m×2.7m の正方形のコンクリート造りで，入口の扉のある壁面以外の壁には窓があり，奥に香炉が3個置かれている。内部の床は砂利敷である。聖域の構成軸は，山の等高線の上下軸の南北軸上に古い石組，墓，拝殿，広場と展開する。しかし，ウンジャミ祭の時には，拝殿のあ

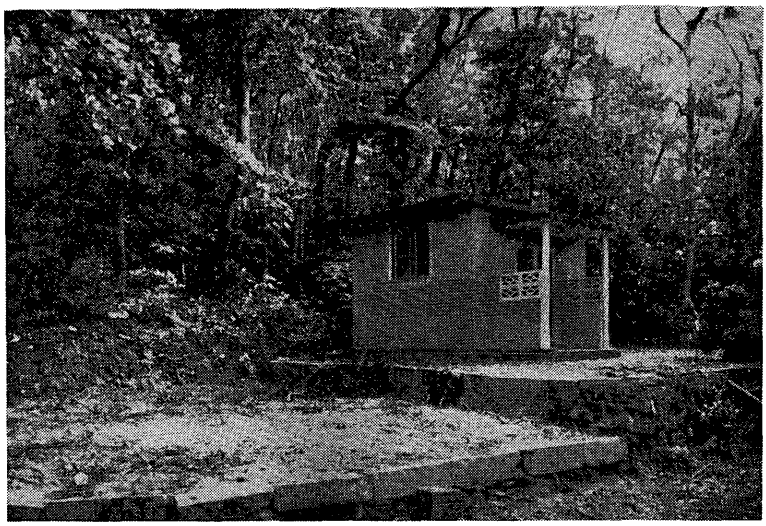


写真 3　安波の御嶽ヌーガミの拝殿と背後の墓の石積み。右の崖に香炉が置かれる。

る広場東端の高さ 1.4m に置かれた二つの香炉を拝むという。この御嶽の特質は，墓と拝殿を関係づける軸を主に，祭祀にはそれに直交する意識方向があると同時に，近年に建設された拝殿外壁が青色であることである。

事例 4　ウイグスク　（所在地：大宜味村字謝名城）

謝名城の小字グスクの背面丘陵の頂上部にウフグスク（大城）とナカグスク（中城）の二つの御嶽がある。ウイグスクはこの二つの御嶽からなり，根謝銘グスクの跡である。

ウイグスクはウフグスクを含む領域とナカグスクと神アサギを含む領域，さらに両者の中間の広場の 3 領域から構成され，高低差によって区分される。ウフグスクはヒジャイナー（左縄）を楕円にめぐらしたイビ部分と広場からなり，イビ領域標示（左縄）前面に香炉が置かれ，イビ内部には石組された窪地が存在する。ここには人骨があったと伝えられている。なお広場北端にはグスク遺跡の石積みがある。ウスグスクとナカグスクの中間の広場の北端崖下には 2 個の香炉が置かれ，いずれもウフグスクの方向を向いている。ナカグスクのイビは約 6m 程の円形で，周囲に拝所が設けられ，イビ内部には蒲葵とマーニ林があり，周囲に左縄が張り巡らしてある。ウフグスクと同様にナカグスクにも人骨があったと伝えられる。イビに接して 2 ヵ所香炉が置かれた部分があり，1 ヵ所は南側，もう 1 ヵ所は西側で，小祠も置かれる。神アシアゲは 5.2m×5.2m の正方形平面で，木造差屋型である。人が座る床は板張りで，その他は土間のままになっていて，北側の柱には 1 ヵ所マーニ付の柱がある。神アシアゲの

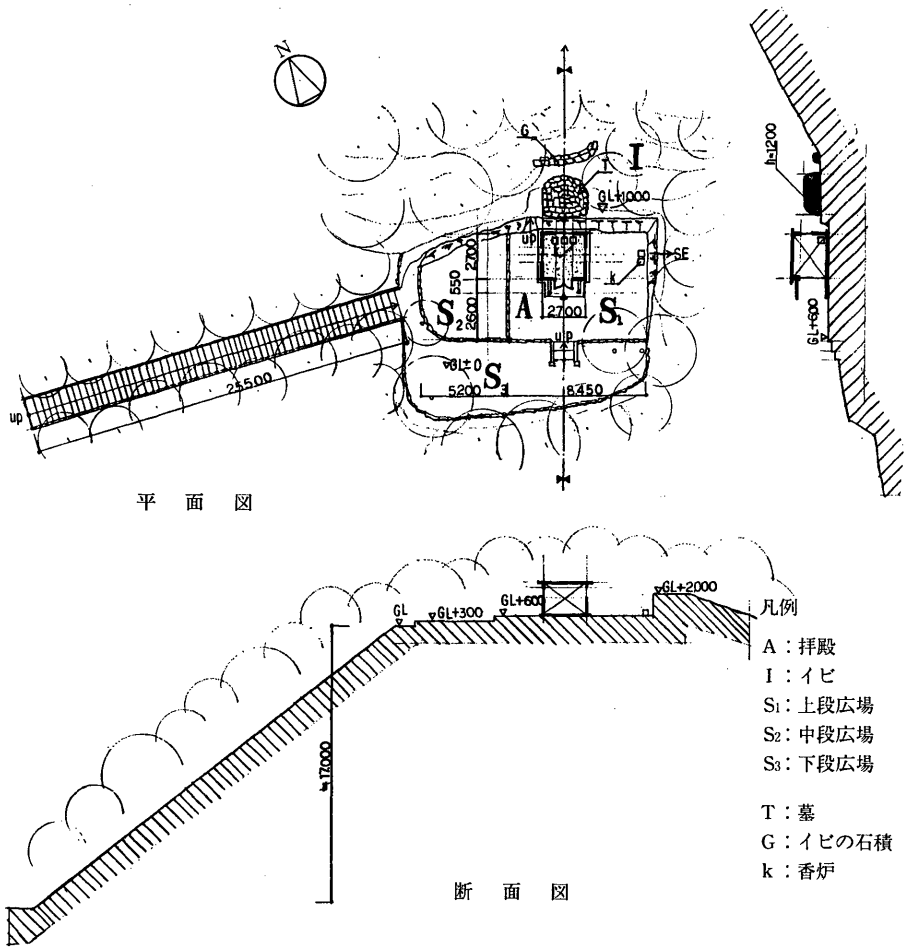


図3　ヌ　ー　ガ　ミ

東側の広場には，間口 5.2m×奥行 2.6m の位置に8本の高さ 30cm の石柱があって，祭祀の際，この部分に木製の板が敷かれるようになっている。さらに広場の東端には東向に小祠があり，内部に香炉が1個置かれている。

ウイグスクは，グスク形式の二つのイビをもつ御嶽として，他に類をみない形態的にも貴重なものである。この御嶽構成は，ウフグスク域とナカグスク域に分かれ，中間領域の広場はウフグスク域とみることが出来よう。ナカグスクのイビ形態や神アシアゲ，広場の関係も，祭祀の際，どのように使用されるのか，今後の調査が持たれる。

事例5　ミーウガン　（所在地：本部町字備瀬）

ミーウガンは備瀬集落の北方海上の小島で，島内の東海岸には墓が多く，ムンジュ

写真4　ウイグスクの神アシアゲと中城広場への入口。左を上るとウフグスク，右にはナカグスクのイビがある。

凡例

I_1：ウフグスクのイビ
I_2：ナカグスクのイビ
A：神アサギ
S_1：ウフグスクの広場
S_2：ウフグスク下段広場
S_3：ナカグスクの広場

H：小祠
G：グスクの遺跡

c：石柱
k：香炉
nw：左縄
t：石碑

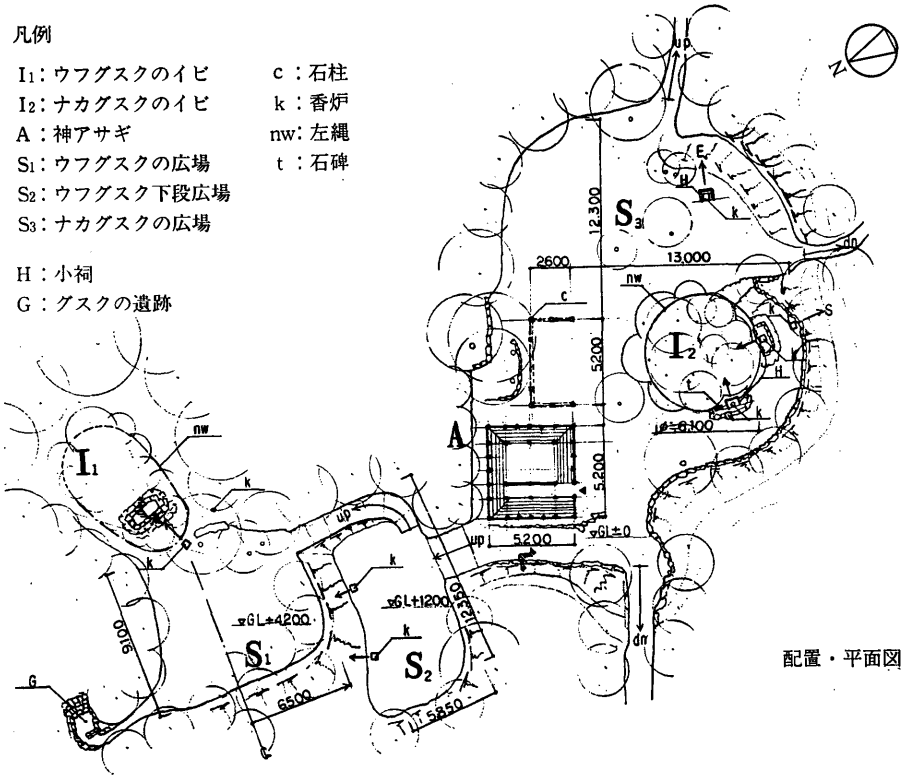


図4　ウ イ グ ス ク

写真5　備瀬の小島ミーウガンの洞窟。

クイ浜と呼ばれる自然洞穴である。洞窟の附近には蒲葵が繁茂し，コンクリート製の小橋参道を入ると，奥行約3m，内部間口2.5m程の洞窟がある。その内部にはビジュルがあり，前方に香炉が3個置かれている。この拝所はアラサケ嶽とみられていて，この小島は，死者の島であると同時に，来訪神の来訪径路における中継ぎの場所であったらしい。小島に渡れない時には，本島の参拝バンタから通しをする。

事例6　島の川御嶽　（所在地：名護市字饒平名）

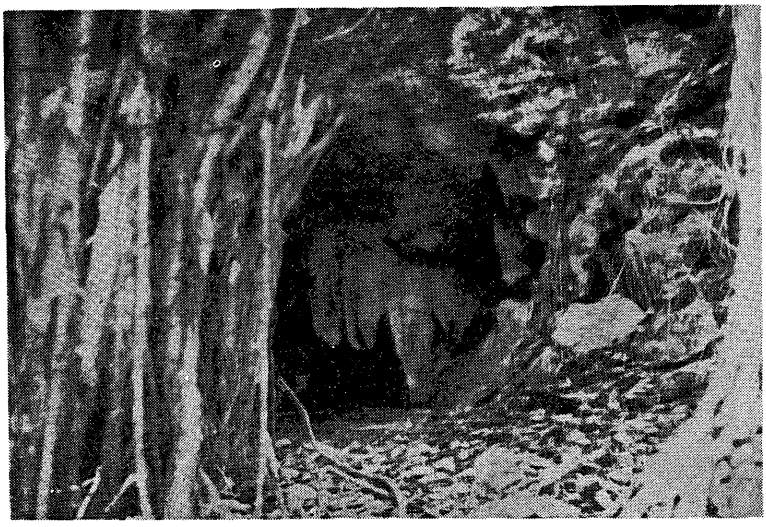


写真6　島の川御嶽のフルディラ，入口には鐘乳石が帯状に下る。

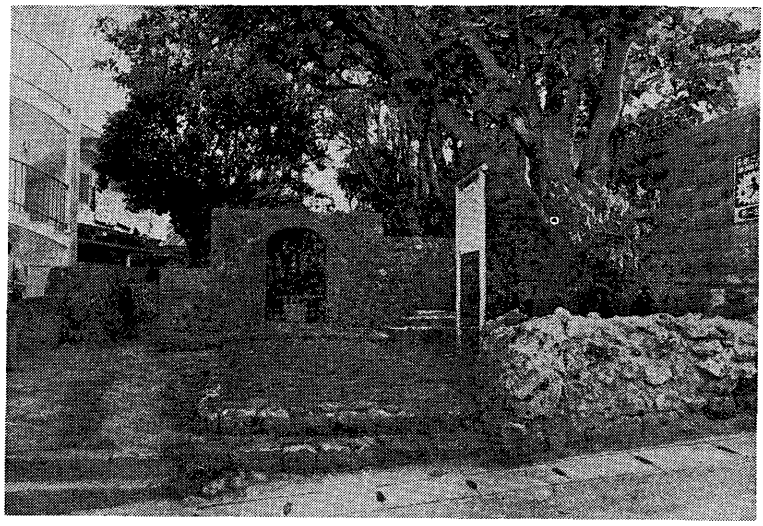


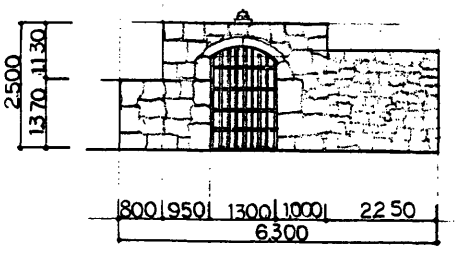
写真7　安谷川御嶽の宝珠をのせたアーチ門の石積み。

凡例

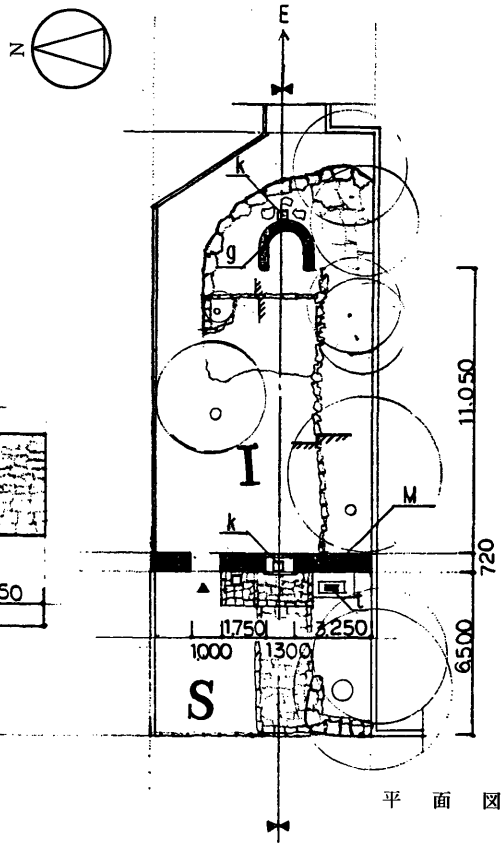
I：イビ
S：広場

M：石門

k：香炉
t：石碑
g：イビ石積



M　詳　細　図



平　面　図

図5　安　谷　川　嶽

饒平名部落の北東部の丘一体は島の川御嶽と呼ばれ，御嶽は農道によって西側のティラと東側のメーダキ（前嶽）とに二分される。ティラのある丘陵内部には蒲葵林，で小道には蒲葵の葉が積重なっている。またティラにはフルディラ（古いティラ）とミーディラ（新しいティラ）とがあって，フルディラは参道途中より逆時計方向に回りこむ。洞窟前面には人が2～3人座われる広場があり，その奥の入口に鐘乳石が帯状に下った洞窟がある。内部は人が入れる程の広さで，ビジュルが置かれ，その前に香炉が1個ある。ティラは御嶽内の神骨が納められた洞穴といわれているが，別に神骨がない。部落の人々はティラで子孫繁栄を祈願するために，門中御願を9月9日に行なう。

事例7　安谷川嶽　（所在地：那覇市首里当蔵町）

安谷川嶽は「三平等の大あむしられ」のうち，首里あむしられの管轄下にある首里城外の六つの御嶽の一つであった。この御嶽は東西軸で構成され，宝珠をのせたアーチ門を中央にもつ石垣によって内域と外域に分けられる。外域アーチ門の前面には石香炉が軸上に置かれ，その左右に石碑がある。前面庭には石畳が門への進入部に敷かれ，外域から内域へは石垣の北方向の開口部から進入する。内域は半円形の低い石囲いの内部に馬蹄形のコンクリート製の場所が設けられ，一段高い所に香炉がある。

事例8　内金城嶽　（所在地：那覇市首里金城町）

金城町の崖下の長手方向約50m，短手方向約16mの広場に二つの拝所がある。北の拝所を大嶽，南の拝所を小嶽と呼ぶ。この御嶽は真壁大あむしられ管轄下の六つの

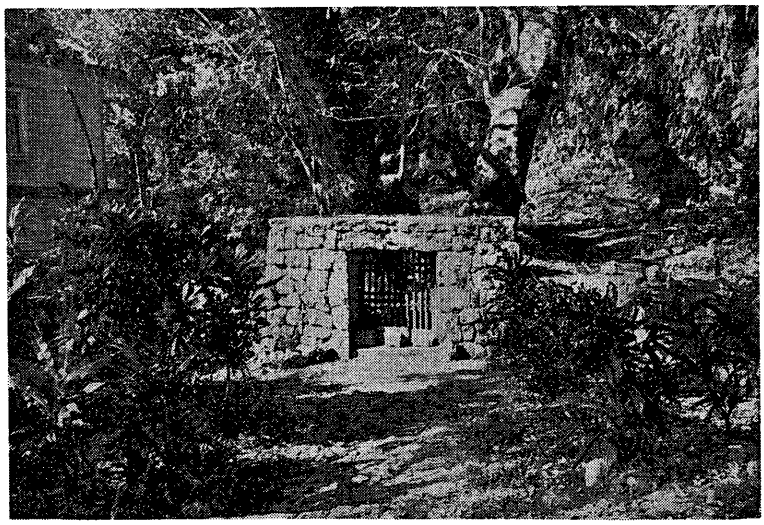


写真8　内金城嶽の大嶽の石門と後方のイベ木。

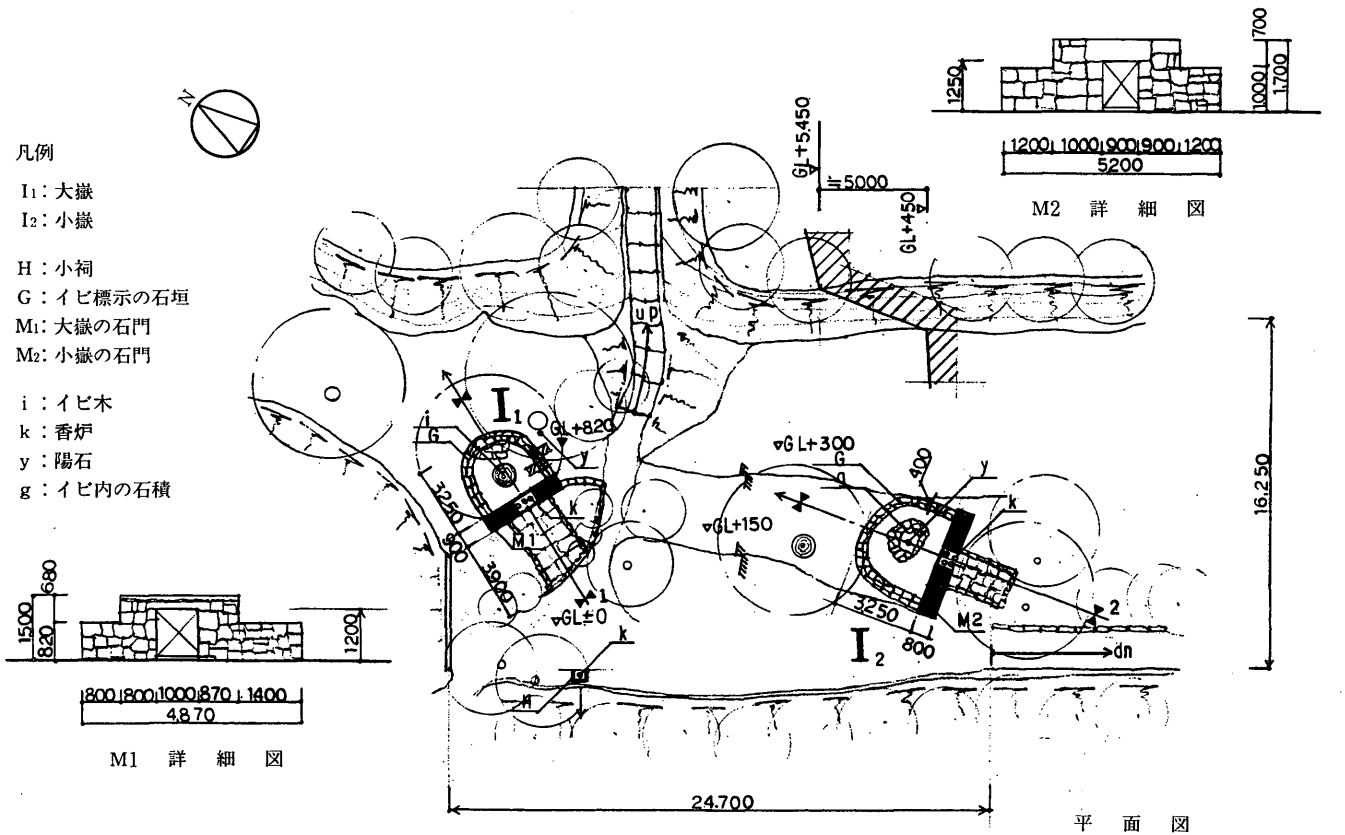

凡例
I1：大嶽
I2：小嶽
H：小祠
G：イビ標示の石垣
M1：大嶽の石門
M2：小嶽の石門
i：イビ木
k：香炉
y：陽石
g：イビ内の石積
M1 詳細図
M2 詳細図
平面図
GL+820
GL+300
GL+150
GL±0
GL+5,450
GL+450
5000
24,700
16,250
3250
800
400
1200
5200
4,870
up
dn

図6 内金城嶽

御嶽の一つで，鬼餅由来伝説とむすびついている。大嶽・小嶽とも直線構成の石門の背後に，半円形の石垣で領域区分されたイビをもつ形式である。

大嶽は門の地盤面と背後の地盤面とに約80cmの高低差があり，門の石積みが一部その擁壁を兼ねている。石門は幅3.4m，高さ1.5m，厚さ90cmで，開口部に香炉が4個置かれている。イビの石垣は奥行約3.2mで，門の石積と連続して積まれ，その内部の中心に赤木の大樹がある。『球陽』(1660) に大嶽の拝殿創建の記事がある。赤木の大樹をイベ木として，この拝殿が造られたのであろう。

小嶽は平坦な地盤で，門は幅5.2m，高さ1.7m，厚さ80cmと大嶽より規模としては多少大きい。開口部には石香炉2個と陶器香炉2個が置かれている。イビの石垣は幅40cm，高さ30cmで，大嶽より大きく，また内部にはイベ木がなく，3個の立石を含む低い石積みの中心に陽石がある。大嶽を男性，小嶽を女性に見立て，子孫の繁栄を祈る祈願所ともされている。

大嶽と小嶽は，いずれも拝殿の構成軸が南西から北東，南から北で，共通した方位感によって造られたものであろう。

事例9　拝所グスク　(所在地：座間味村阿嘉島)

阿嘉部落の後方（北側）に，標高84mの椀をふせたような形の山頂に位置する。拝所は南側の祠堂と広場から構成される。

祠堂の構造は東西が厚さ30cmの石積み壁，南北が全面開口の形式で，間口×奥行は4.4m×2.4m，軒高1.2mで，祠の床は地盤面より石積で40cm高くなる。開

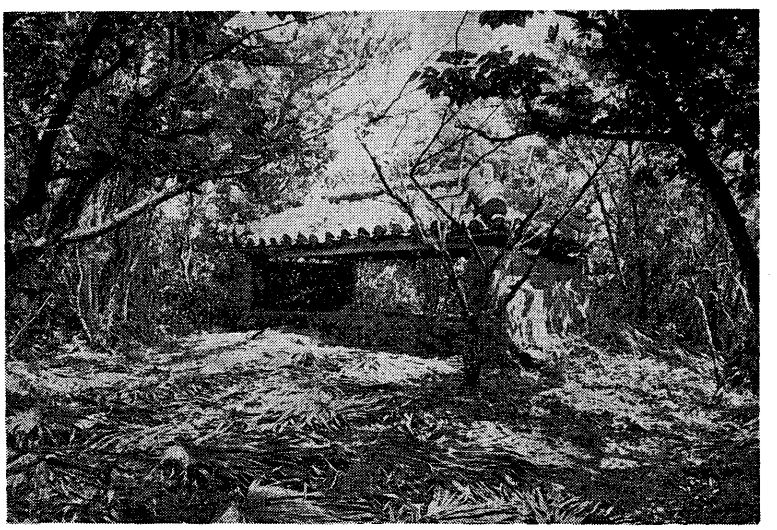
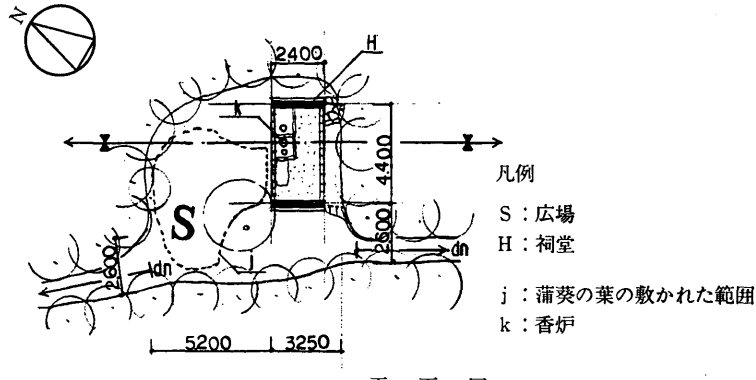


写真9　阿嘉島の拝所グスク。2面開放の祠堂と広場に敷かれた蒲葵の葉。



平　面　図

図7　拝所グスク

口部の高さ寸法は80cmときわめて低く，尾根は木造赤瓦葺寄棟構造である。内部は海砂が敷かれた香炉が置かれた部分と枝珊瑚が敷かれた部分からなる。中央に円形の珊瑚石香炉が置かれ，その左右に陶器製香炉砂で口まで埋られ，香炉内部にも砂が詰められている。

広場には祭祀に使用された蒲葵の葉が一面に敷かれている。村民は南向きに祠堂の方向を拝み，神女は祠堂の南側から祠の開口部を通して北方向を拝む対座形式をとっている。

拝所グスクは山中にある大御嶽・仲御嶽・クボー御嶽と部落との中間地点にあり，部落内の御殿のメーの位置関係からすると，ウドン・ヌ・メーと拝所グスクは軸線が一致する。さらに祠堂内の香炉の数と山中の御嶽の数とが符号し，また祠堂の構造が全面2面開放であることを考えると，拝所グスクは遙拝型の御嶽といえよう。ちなみに，この形式の祠堂は他の地域にはみられない点で，貴重な事例である。

事例10　大嶽　（所在地：座間味村阿嘉島）

阿嘉島で『琉球国由来記』に記載されているスズキヨ御嶽かと思われる。大嶽は海抜194mの山項約10m下った山の南面にある。御嶽は祠堂と広場から構成され，山頂・祠堂・広場と南北軸上に展開している。

祠堂は三方石積みの上モルタル塗で，間口×奥行が3.1m×2.1mで他の二つの御嶽より大きく，上部は拝所グスクと同様に，木造赤瓦葺寄棟構造である。三面の壁上部には正面に2ヵ所，側面にそれぞれ1ヵ所，小さな窓があけられている。この祠堂は1927年4月7日（旧暦）に建造されているが，他の御嶽の祠はいずれも1965年の建造である。内部は2段に区分され，奥が高く，中央に加工された珊瑚石香炉が1個，左に陶器香炉が3個，右にブリキ製の香炉が1個置かれ，上段と下段の床に白砂が敷

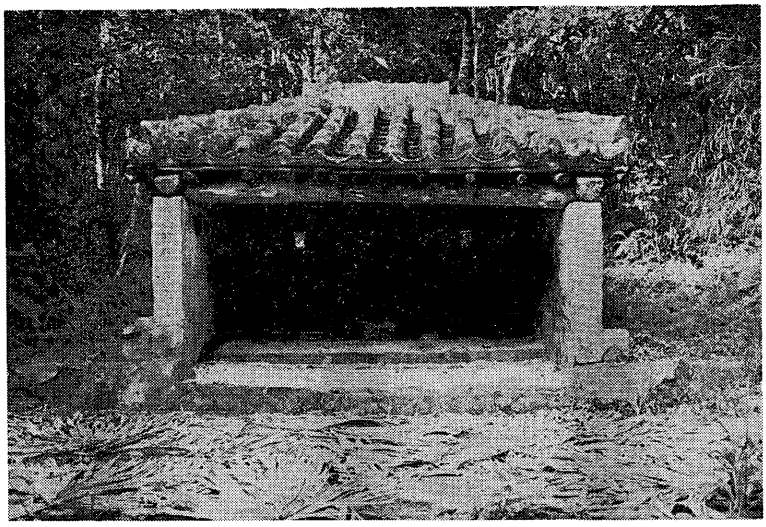
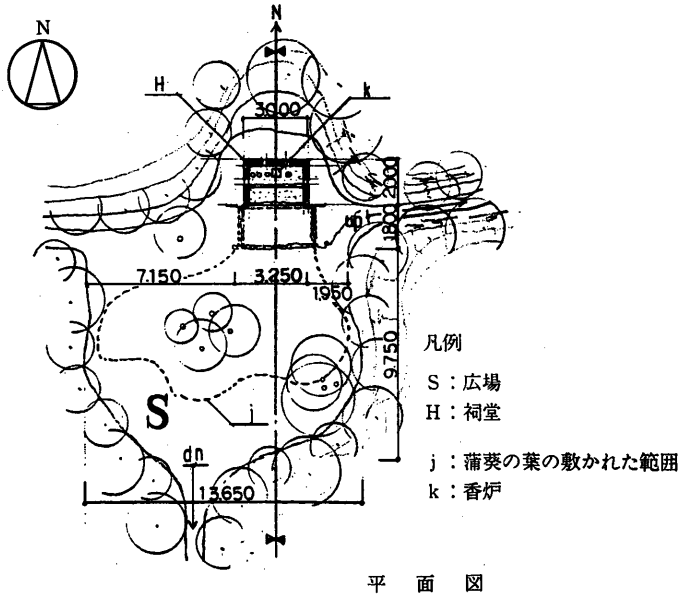


写真10　大嶽の祠堂の上段に置かれた香炉と背面に設けられた高窓。

かれている。祠堂の前面は約 4m×1.8m で，蒲葵の葉が敷かれた前面広場があり，10cm 程の高低差で庭と区分されている。

広場は約 14m×10m 程で，南に少し傾斜し，祠堂に近い部分には蒲葵の葉が散乱している。この広場には東と西，南にそれぞれ一本の道がついている。御嶽内には東・西の拝所，アガリブサキとイリブサキがあって，広場から東西へ延びる道はその拝



平　面　図

図8　大　　嶽

所への進入路であろう。アガリブサキは首里へのお通しの場，イリブサキはニライ・カナイへの祈願の場所である。

祠堂の側壁面に開けられた窓の方向とブサキの方向とが一致し，ブリキの香炉を除くと，4個の香炉と壁面の窓の数も同数である。

2) 宮古の御嶽

宮古島とその周辺の島々の御嶽は，一般に聖域内のイビの低い石垣に接して籠り屋がある点で，他の地域とは異なっている。

事例11　ウパルス御嶽　（所在地：平良市池間島）

池間島は平良市の北西に位置する。御嶽は池間部落の東，部落から岬への途中にある。大主御嶽の第1の鳥居から神域入口の中門の鳥居まで約80m の参道を進むと，右手に旧部落跡の石積みがみられ，参道には枝珊瑚が敷かれている。参道と中門鳥居の延長軸上にコンクリート製の小祠がある。その構成軸の左右は，左側が香炉群を含む神域と籠り屋を含む部分とに分けられる。

白砂で地盤面より 30cm 台形状に盛り上げられた場所には，ココタンの大樹（神木）の株があり，半円形状に140個余りの香炉が埋めてある。香炉は間口方向に11個，奥行方向の多いところで14個を数えることが出来る。手前左端の香炉は1番香炉と呼ばれ，祭祀の際，最初にこの香炉に線香があげられる。香炉群と奥のウイバラヤマとの間には，3カ所の入口のある高さ 45cm の石垣があり，その入口の一つはカンヌ

写真11　ウパルス御嶽の据えられた香炉群と後方の石積み。
左側の角香炉は殿様香炉と呼ばれる。

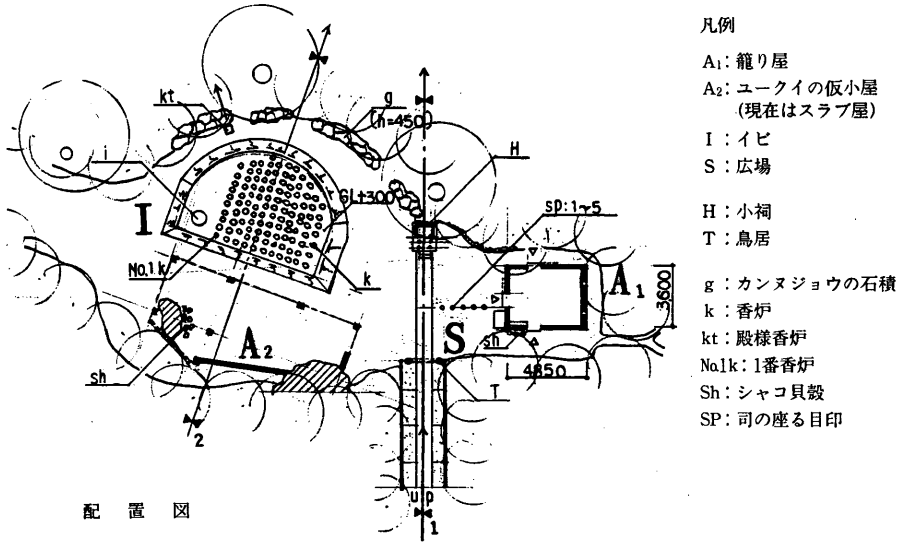


図9　ウパルス御嶽

ジョウ（神の門）と呼ばれる。石垣に接して殿様香炉と呼ばれる黒石製の角香炉が1個置かれている。香炉群の前面には現在，鉄筋コンクリートのスラブ小屋があるが，以前はユークイの時に仮小屋が建てられていた。後背面の岩の下には数個のシャコ貝の貝殻が置かれている。配置的には奥の石垣の中央入口，香炉群，スラブ小屋の構成軸方向が存在する。

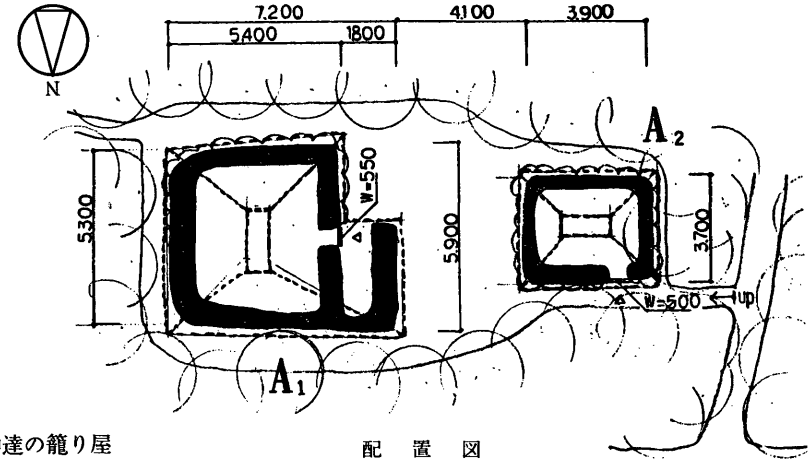
一方，参道と小祠軸の右側は籠り屋前面の広場と籠り屋からなる。広場には枝珊瑚の欠片が敷かれ，5名の神女たちの座る位置の目印がある。籠り屋は間口×奥行が3.6m×4.9mで，三方向に幅50cmの入口があって，内部の天井の高さは2m程である。外側には天水を溜める水槽とシャコ貝の手洗いがある。ちなみに，池間島の大主御嶽の特色は，その特異な香炉群にある。

事例12　島尻・狩俣の籠り屋　（所在地：平良市字島尻，字狩俣）

島尻御嶽はフッムトウ（国元）と呼ばれ，島尻部落の北東にある。ウヤガン祭に日夜籠るクムズダー(kumu'dza:)のある場所とムトゥという祭祀用家屋のある場所は，ムトュジマと総称されている。

島尻の籠り屋の構成は東北軸上に大小2棟の小屋からなる。東側の杜のイビ近くにある小屋は祖神たちだけが籠る小屋，入口近くにある小屋はトマンマ4名が番をする小屋である。祖神たちの籠り屋は西側に入口を取り，間口・奥行5.9～5.3m×7.2mで，入口部には薪屋があり，その石積みが進入方向からの視線を遮る。内部を囲う石

写真12　島尻のムトゥジマにある祖神達の籠り屋。手前にトマンマの小屋がある。

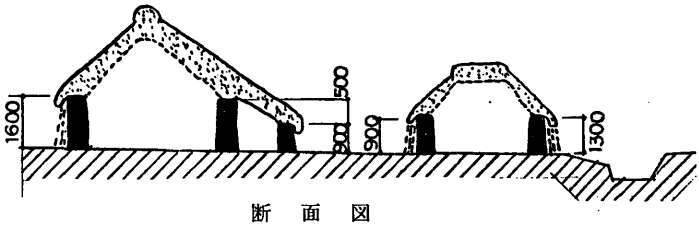


凡例

A1：祖神達の籠り屋

A2：トマンマの番小屋

配　置　図



断　面　図

図10　島尻の籠り屋

写真13　狩俣ニスノウタキの拝所にある籠り屋。象徴的な空間構成である。

積みは高さ1.4〜1.6mと低く，尾根は木造茅葺である。入口以外には開口部はなく，きわめて閉鎖的な空間である。トマンマが番をする小屋は間口×奥行，3.9m×3.7mと祖神たちの小屋より小さく，進入路に入口が面しており，同様な構造形式である。小屋の石積みは野面積みで，透間があるためか茅の束や苫が外側に立掛けられている。

狩俣部落は宮古島の最も北端に位置する。御嶽は部落後方から北東海岸までひろが

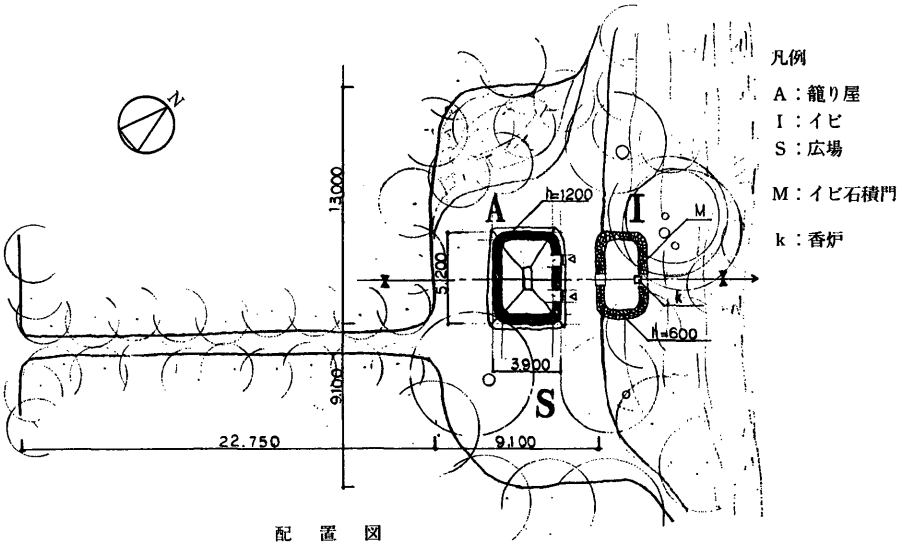


図11　狩俣の拝所と籠り屋

っている。部落の西方のニスノウタキの拝所は，東西軸上にイビの石垣と近接した籠り屋からなる。イビの石垣で区分された部分は長方形平面で，一方に入口を，奥正面には石垣を一部開いた形で門状の形態をとる。香炉が1個置かれ，その上部に平らな石がかぶせられている。

籠り屋はイビに面して左右に1ヵ所づつ入口があり，間口×奥行 5.2m×3.9m の石積みで囲われ，石積の高さは 1.2m と低い。入口以外には開口部がなく，屋根は木造茅葺である。籠り屋の建築的構造は島尻の籠り屋と同様であるが，入口の形式は，狩俣部落内の拝所であるザーヤと同じように片面に二つの入口をもつ。

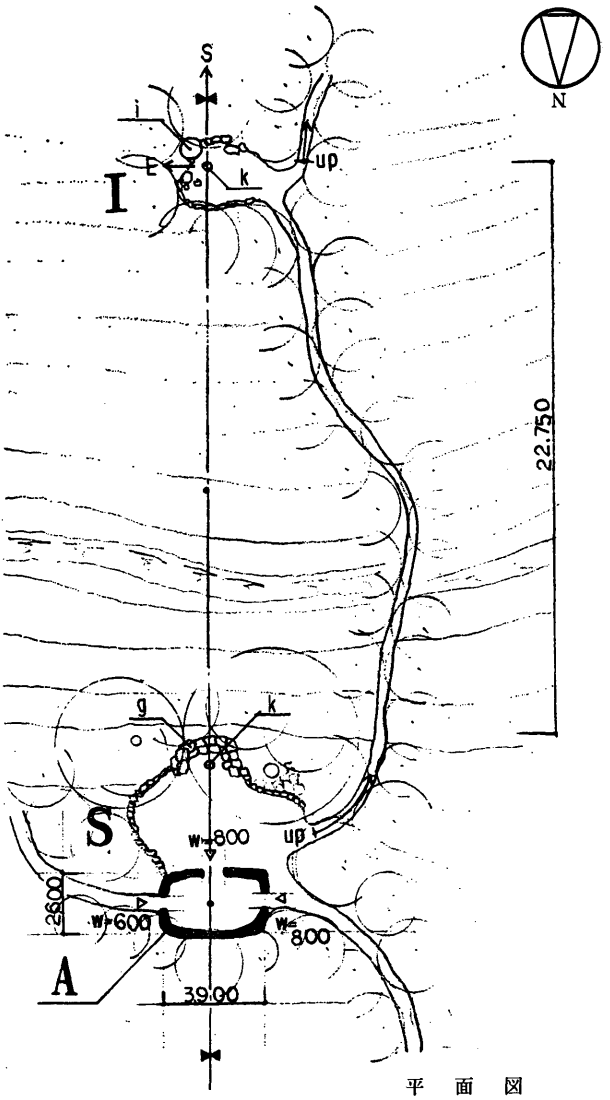
島尻・狩俣の籠り屋は，共通した建築的構造をもつと同時に，祭祀において，神女が夜籠り(ユーグマー)をするための重要な家屋であり，本来，閉鎖的な空間であった。

事例13　タケナカ御嶽　(所在地：域辺町字保良)

保良部落の南々東の小高い丘にタケナカムトゥがある。丘の背後は断崖になっていて，もと遠見台であったといわれている。御嶽は，この山の北斜面に，北南軸上に籠り屋のある領域と中腹のツカサノイビシという霊石がある場所からなる。

籠り屋がある場所は山の麓で，籠り屋の前面に小さな広場が，その奥に半円形のイビシがある。香炉の代りにブリキの罐が1個置かれている。籠り屋はノビ方向と左右2ヵ所に入口が設けられ，間口 3.9m，奥行 2.6m の楕円形である。現在，屋根がなく，中柱を中心に柱上部と石垣上部とに14本のサスが掛けられ，部材は荒縄で結ばれている。柱の長さは 1.8m 程の自然木である。石垣の高さは 1.3m から 80cm 程で

写真14　タケナカ御嶽の籠り屋の石垣と屋根の小屋組。



平　面　図

凡例

A：籠り屋，I：イビ，S：広場
g：イビシーの石積，i：ツカサノイビシの霊石，k：香炉

図12　タケナカ御嶽

低い。中柱，イビへの出入口，イビシと香炉の延長上に霊石がある。20m程東側の道を上ると，中腹にツカサノイビシの霊石が立ち，前面に香炉が置かれている。

事例14　赤崎御嶽　（所在地：下地町字皆愛）

赤崎御嶽は皆愛部落の東海岸にある。鳥居，参道，広場，イビは北南軸上に展開する。鳥居から広場まで50m程進むと，幅4m，奥行16m程の広場に出る。広場の奥には間口3.3m，奥行9m程の石垣に囲われたイビがある。入口の両側の樹木には左縄が結ばれている。イビ内には白砂が敷かれ，屋根の欠損した二面開口形式の小祠があり，その前面に石の角香炉が1個置かれている。その他，陶器製香炉を数個置かれている。御嶽の平面から海岸方向に行右に2本の道があり，左縄は道に沿って海岸まで続いている。おそらく左縄で結界された領域がイビ領域であろう。海岸の岬には豊作を占うムカガーがある。

事例15　石城御嶽　（所在地：下地町字与那覇）

与那覇部落の南西，石城山にあって，前山御嶽とも呼ばれる。御嶽の東方向に入口があり，北側に小さな広場がある。イビと籠り屋は南北軸上にある。コンクリート造

写真15　赤崎御嶽のイビの石積みと左右の樹に張られた左縄。

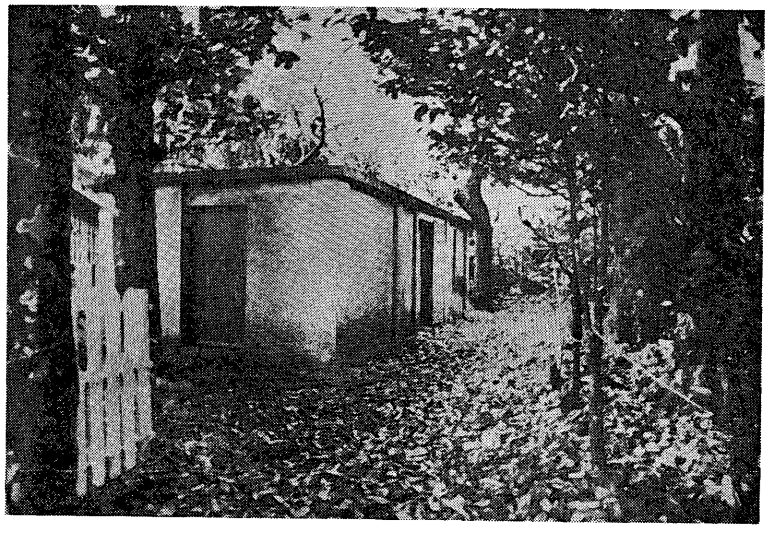
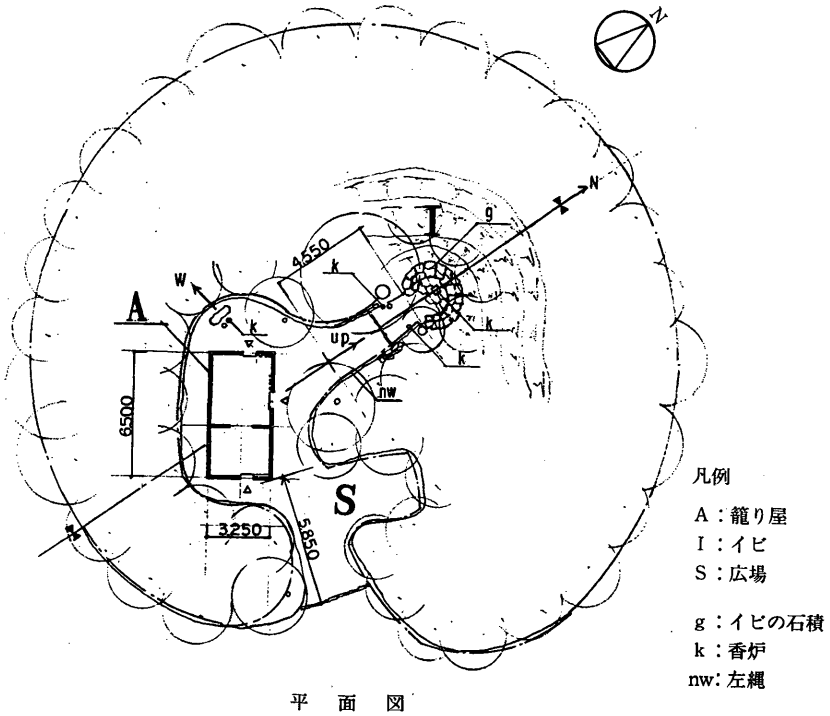


写真16　石城御嶽の籠り屋と聖域を取囲んだ左縄。右方向にイビの石積みがある。

りの籠り屋は間口×奥行が6.5m×3.3mで2室構成で，広い部屋の北側入口はイビ方向の軸上に位置する。その他，東・西に1ヵ所ずつ入口がある。イビは籠り屋の地盤面より高い位置にあって，円形の石積みの中心に石香炉が1個置かれている。籠り屋からイビまでは5m程であるが，赤瓦によって参道の端が示され，イビの石垣の前の大樹の根本に香炉が2個置かれ，反対側の樹木の下にも香炉が1個置かれている。その2本の木から左縄が全域に結ばれ，それは森全体に及ぶ。籠り屋の西側外部には，



平　面　図

図13 石 城 御 嶽

西方向の石の前に香炉が2個置かれている。

3) 八重山の御嶽

八重山の御嶽の配置形式はよく整っている。基本的には入口に鳥居があり，庭に入ると拝殿が設けられている。拝殿の背後にイベがあるが，イベと庭は石積みの門で二分され，門の入口には香炉が置かれている。また，イベの奥には祠や香炉が置かれている。ここでは，石垣島川平地区の事例および竹富島，小浜島，黒島の事例を取上げる。

事例16　赤イロ目宮鳥御嶽　（所在地：石垣市字川平西村）

この御嶽はアーラオンとも呼ばれ，川平部落の西側半分と東側半分のほぼ境目に位置し，こんもり繁った小高い木立ちの中にある。

御嶽は東西軸上に直線構成され，鳥居・拝殿の出入口，石積み門の開口部，イビ香炉は一直線である。庭は高低差によって石積み門前面の広場と拝殿（オンヤー）のある広場，下段広場に三分化されている。拝殿は間口×奥行約5m×3.8m で，木造赤

瓦寄棟形式である。内部には床が貼られ，東側イビ方向に高窓があり，神棚に香炉が1個置かれている。拝殿のある地盤面と石積み門前面の広場の間には，石段が3段あって一段と高くなり，その広場の北側にビジュル石がある。石積み門は幅8.6m，高さは約1mから1.8mで，中央から両側に低くなっている。入口部は幅70cm，開口高さ1.7mで，人が一人入れる寸法になっている。開口上部には厚さ15cmの平板石が乗せてある。

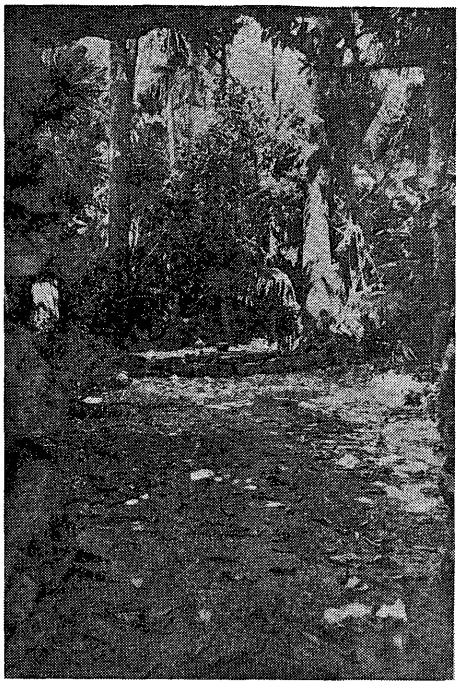


写真17　赤イロ目宮鳥御嶽。イビ奥に置かれた香炉と石積み。

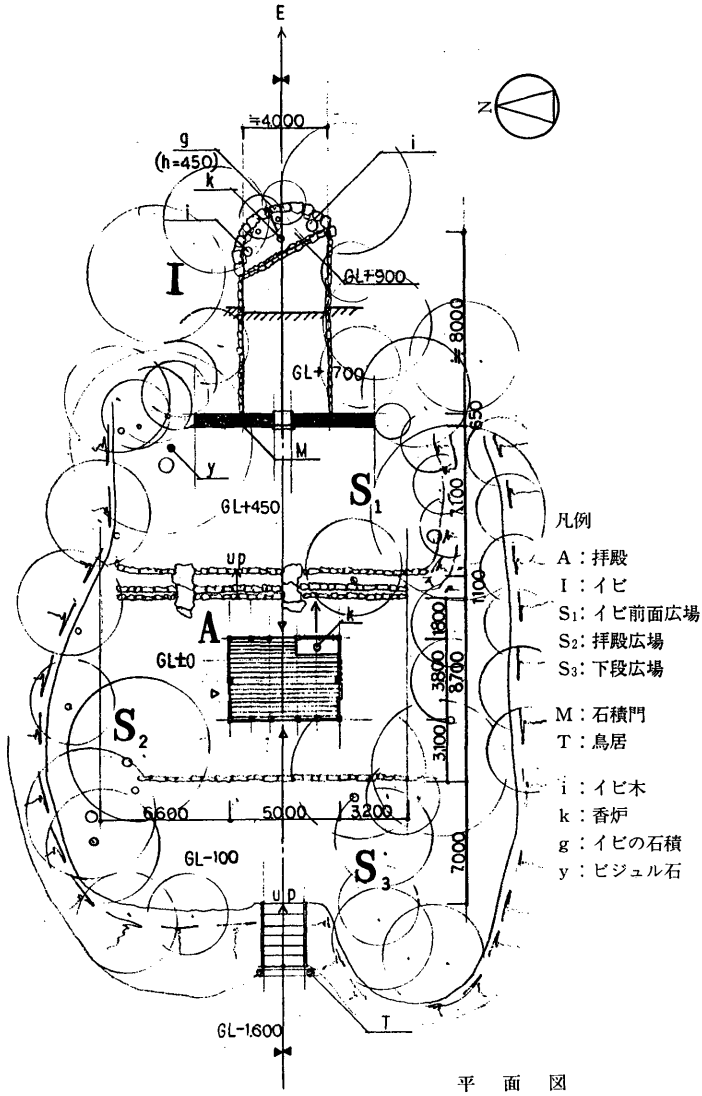
イビは前面の庭より25cm程高くなっているが，イビ領域の地盤面より15cm程低く，周囲からは石積みで区分されている。間口約4m，奥行は香炉のある場所まで約8mである。イビの奥の香炉の置かれる部分は20cm程高く，半月状の形態をとり，奥の半円状石積みは高さ45cmで，大きな蒲葵が左右に2本立っている。香炉の拝み方向は軸線上より北方向にずれている。

伝承によると，この御嶽は宮鳥御嶽への御通しの性格をもっていて，祭祀施設として人為的に建設されたように思われる。その平面構成の形式に建築的構成規範が見られるからである。

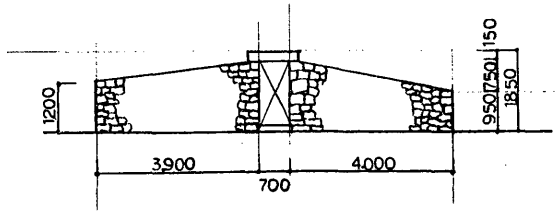
事例17　浜崎御嶽　（所在地：石垣市字川平大兼久）

この御嶽は川平部落の東側の川平湾の砂浜にあって，キファオンと呼ばれる。

御嶽の構成は拝殿のある庭と石積みの門のある石垣で区分されたイビとからなる。鳥居，拝殿，石積みの門の入口，イビ香炉は北西―南東軸上にあり，一軸構成である。拝殿は間口×奥行が5.9m×4.7m，コンクリート造りの赤瓦葺寄棟で四方に出入口が1ヵ所ずつある。内部は床貼り，北側イビ方向に高窓があり，神棚に香炉が1個置かれている。イビ前面の石積みは幅11.5m，高さ1.4mから45cmで，中心から端部へと低くなり，入口開口部は幅80cm，高さ1.2mで，上部に厚さ20cmの平板石が置かれている。入口開口部の右側には幅50cm，開口高さ30cmの窓が地盤面より25cmの所に設られ，その前面は白砂が盛り上げられ香炉が1個置かれている。その



平　面　図



M　詳　細　図

図14　赤イロ目宮鳥御嶽

位置は拝殿の香炉，高窓の位置と対応関係にある。イビ内部は砂地で高低差がなく，石門より約6mの位置に香炉が1個置かれ，半円状に高さ25cmの石積みがある。

この御嶽にも，平面構成上の建築的規範が見られる。

事例18　花城御嶽　（所在地：竹富町字竹富花底原）

竹富島には『琉球国由来記』に記載されたムーヤマ（六山）と呼ばれる六つの御嶽がある。その一つである花城御嶽はハナスコオーンと呼ばれるが，六つの御嶽の形態はいずれも基本的に同じ構造である。

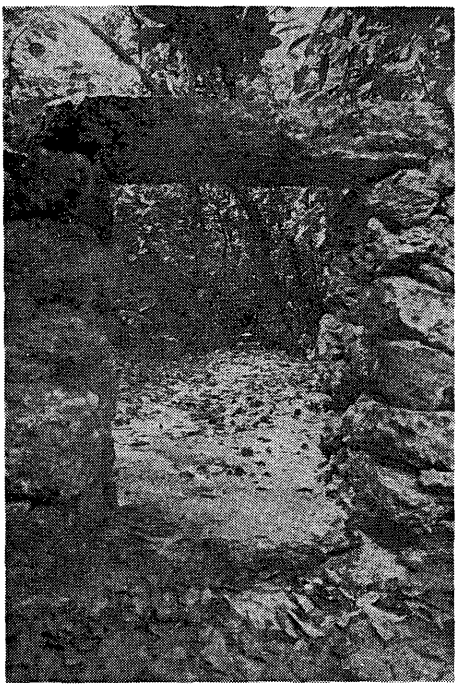


写真18　浜崎御嶽の石門から見たイビの香炉。

花城御嶽は東屋敷から東海岸へ抜ける道にある。参道入口にはコンクリート製の鳥居があって，参道は幅2m，20m程進むと幅が3.4mと広くなり，さらに10m進むと広場に出る。左右の石垣は進行に従って35cm，55cm，70cmと高くなる。広

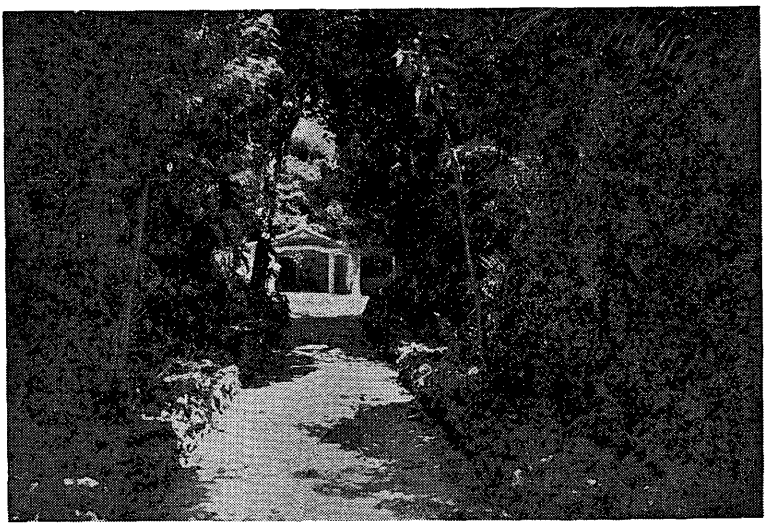
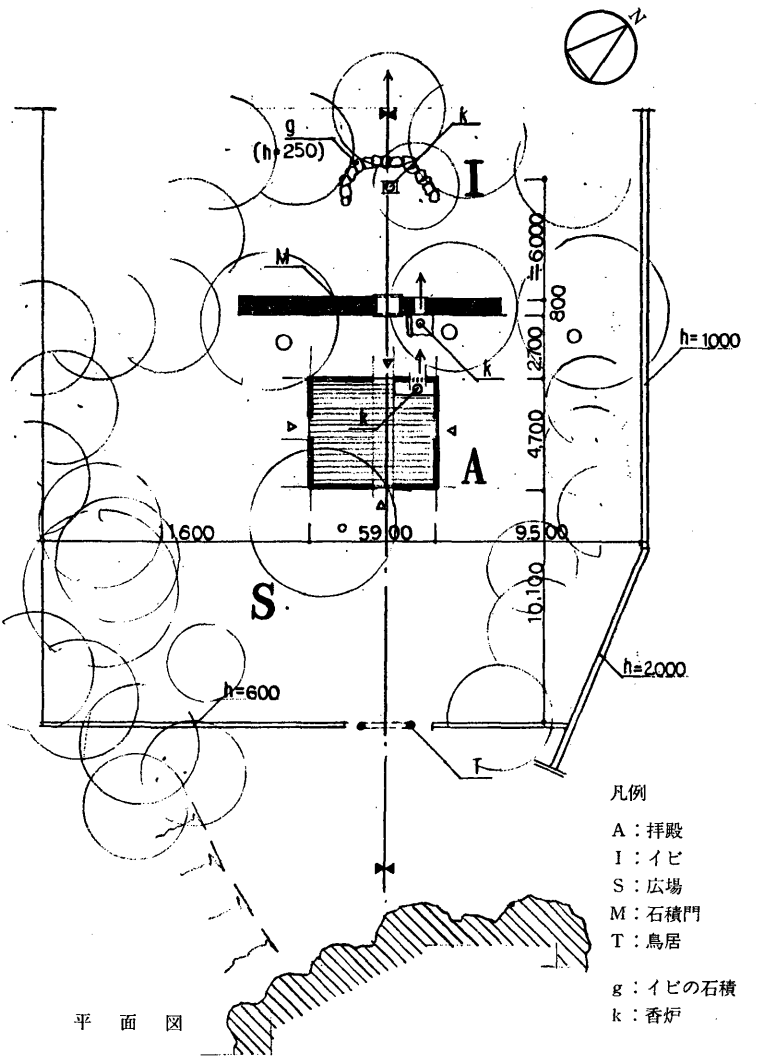
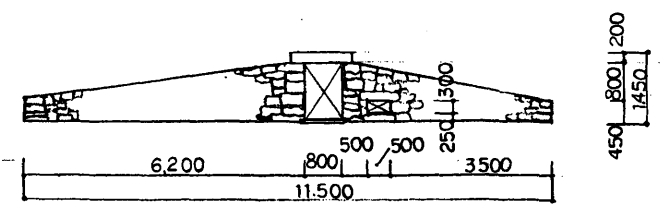


写真19　竹富島の花城御嶽の参道の正面には拝殿がある。





M　詳　細　図

図15 浜 崎 御 嶽

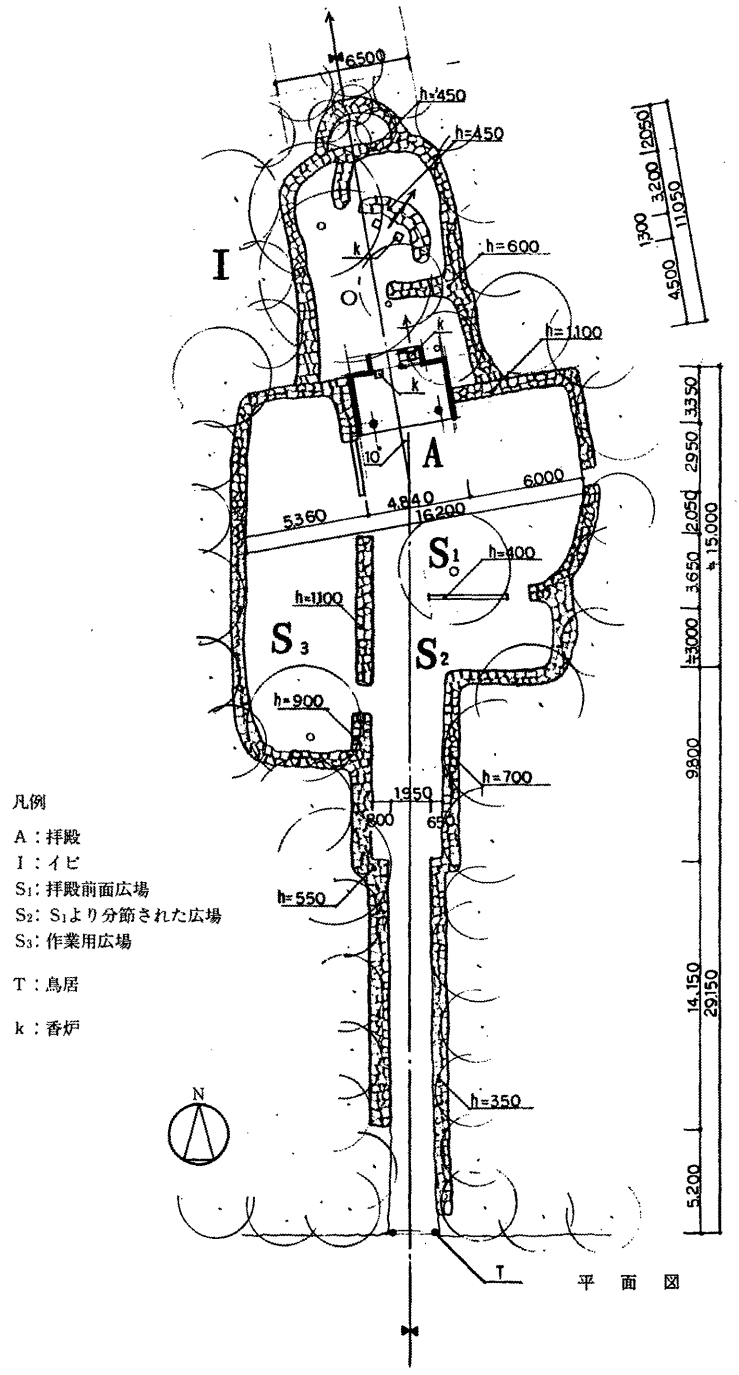

6500
h=450
h=450
h=600
h=1100
I
k
A
10
6000
4840
5360
16200
S1
h=400
h=1100
S3
S2
h=900
h=700
1950
800
650
h=550
h=350
T
N
2050
3200
1300
11050
4500
3350
2950
2050
3650
15000
3000
9800
14150
29150
5200
凡例
A：拝殿
I：イビ
S1：拝殿前面広場
S2：S1より分節された広場
S3：作業用広場
T：鳥居
k：香炉
平　面　図

図16　花　城　御　嶽

場は，拝殿（パイティン）のある広場と参道側の高さ40cmのブロックで区分された広場，さらに高さ1.1mの石垣で区切られた作業用の西側の広場とに分けられる。

竹富島の拝殿はイビ領域を区分する石積みと一体となっている場合が多い。いずれもコンクリート造りで，前面に2本の柱を持ち側面と背面の壁からなる。背面にはイビへの進入口とその東側に扇形の御通しのための窓があり，入口と窓の前には香炉が1個ずつ置かれている。入口に置かれた香炉は，イビに入るための合図のためのものという。拝殿の間口と奥行は4.8m×3.3m，イビは間口6.5m，奥行11mで，高さ60cmから45cmの石垣で囲まれている。さらに石垣から延びた両腕状の石積みによって2個のイビ香炉が置かれた高さ45cmの石積みは意識的に区分されている。イビの香炉は，御嶽構成の基軸である北南軸より東に45°ずれている。また，イビの最奥には小さな石垣の窪みが隣接している。

竹富島の御嶽は，その構成原理に一定の規範があり，御嶽構成基準軸とイビ香炉の拝む方向のずれ，広場およびイビ領域内の空間分節を考える上で興味深い。

事例19　サクヒ・仲山御嶽　（所在地：竹富町字小浜）

御嶽は小浜部落の北西，大岳の南側麓に位置している。この御嶽は仲山ワーンとサクヒワーンが合祀されている。進入路を時計回りに進むと，コンクリート製の鳥居がある。鳥居と御嶽の広場との間には川が谷状にあって，聖域を取巻くように流れている。橋を渡り階段を数段上ると，拝殿のある間口11m，奥行15m程の庭に出る。拝殿と門のある石垣，イビの香炉は一軸構成をなし，参道はこの基軸に直交している。

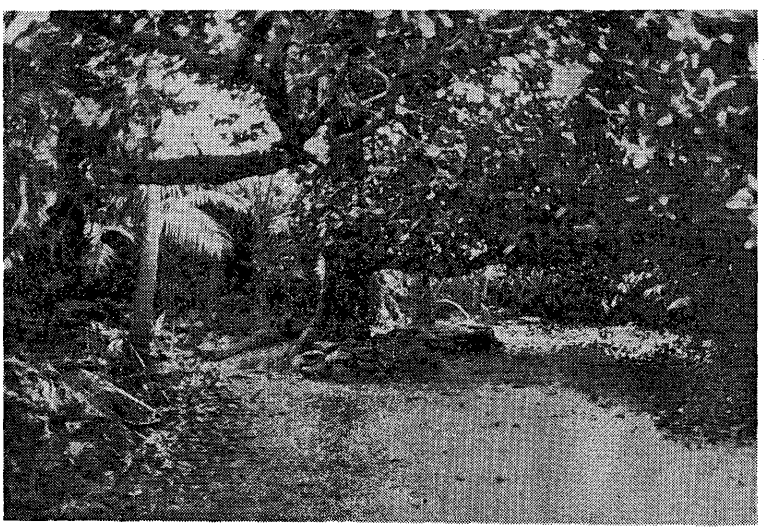


写真20　サクヒ・仲山御嶽のイビ木の下に置かれた平板石積みと香炉。

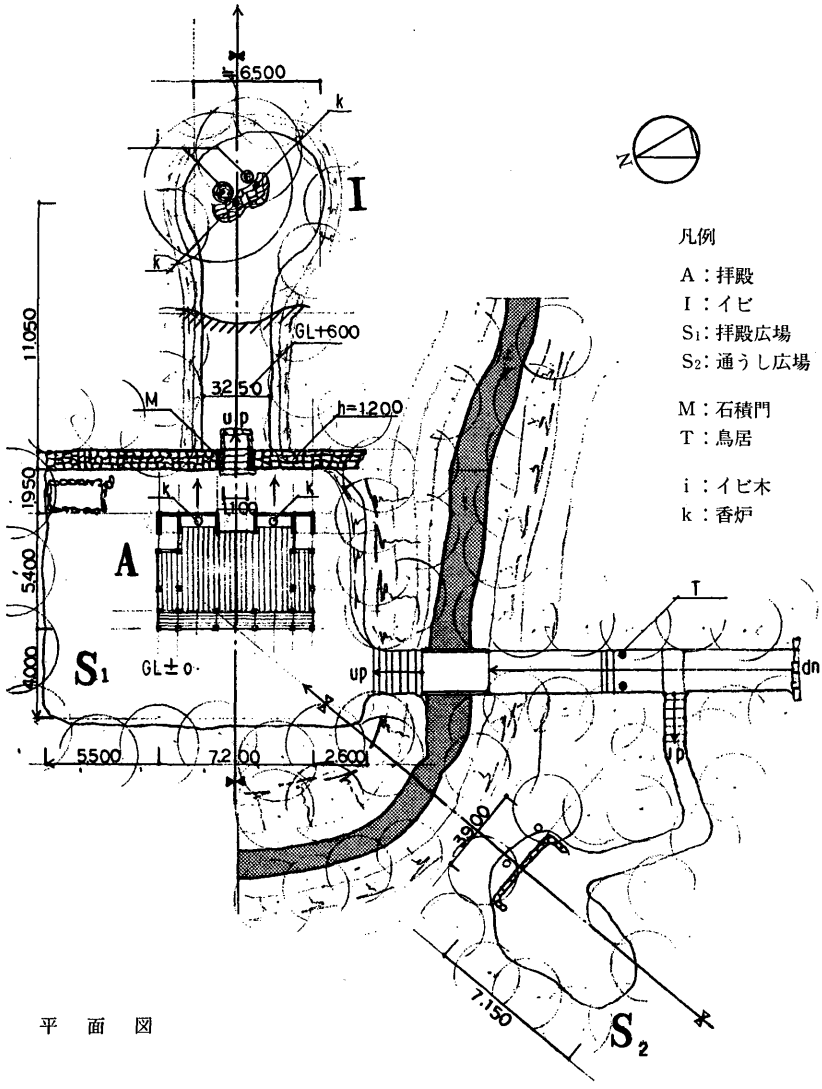


図17　サクヒ・仲山御嶽

拝殿は間口 7.2m，奥行 5.4m の木造寄棟赤瓦葺きで，背面の一部に石積みの土間部分がある。この拝殿の北・南・西の三面は全面開放で，イビ方向の東面にはイビへの出入口を中心に，左に仲山，右に佐久伊の神棚，その上に香炉が1個づつ置かれ，前面に通しの窓がある。イビ入口の門は，左右の一枚石に平板石を屋根として置き，開口幅 1.1m，奥行 1.2m で，石垣はその門の左右に直線上に続いている。イビの地盤面は拝殿の地盤面より 60cm 程高く，内部には石積みなどの領域標示はないが，わず

かに窪地になっている。幅3m程の進入路を11m程進むと，2本の大樹を中心に6.5m程の円形の場所がある。イベ樹の下には半円に取囲むように平らな敷石が積み重ねられ，その上に1個ずつ香炉が置かれている。この樹の下に置かれた石は，佐久伊御嶽の発祥の地といわれる嘉屋真島からもたらされたもので，2年に1度，嘉屋真島の拝所に参拝するたびに，石を1個ずつ持ち帰ってイビ内に置くという。

御嶽の鳥居の前方から西へ高台を上ると，約4m×7mの白砂を敷きつめた拝殿方向にお通しが出来る場所がある。この場所もまた，祭祀施設の一部と考えてよいだろう。

事例20　南風保多御嶽　（所在地：竹富町字黒島南風保多原）

パイフタワーン，ハイフタ御嶽とも呼ばれ，仲本部落南側の海岸近くにある。聖域が北から南に，鳥居，広場，拝殿，イビ参道，イビと展開する。その石積みの量や平面構成は島内や他の地域にも見られない。

この御嶽は二つのゾーニングから構成されている。一つは鳥居から広場，拝殿を含むゾーン，もう一つはイビ参道前面の広場からイビまでのゾーンである。コンクリート製の鳥居から燈籠の置かれた石垣までが広場になっていて，西側の海岸へ抜ける道がある。広場にはコンクリート製の3.9m×3.9mの，北と西が開けられた拝殿がある。その南側の中央に扉のある神棚が設けられ，その内部に線香が置かれている。神棚の後壁面の高窓は，太陽の朝日マークの造形がされている。拝殿の南側には，お通し窓に対応する位置に開口部のある石積み門がある。石積み背後の広場は4m×2.6

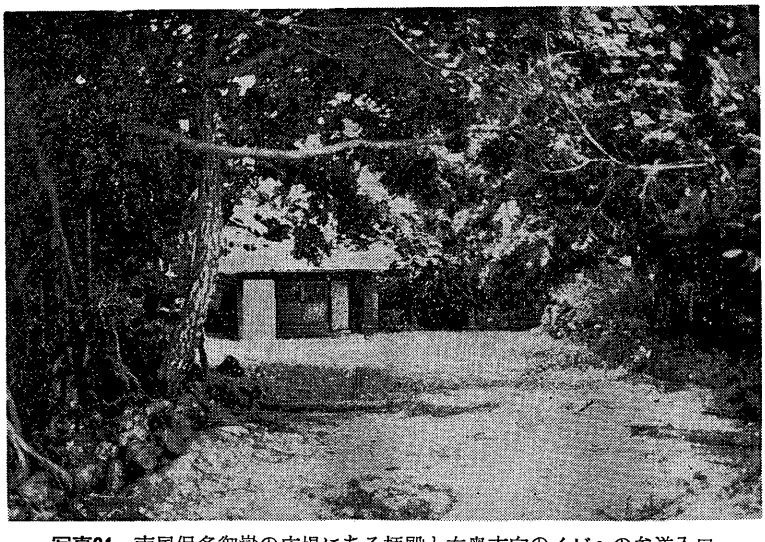


写真21　南風保多御嶽の広場にある拝殿と右奥方向のイビへの参道入口。

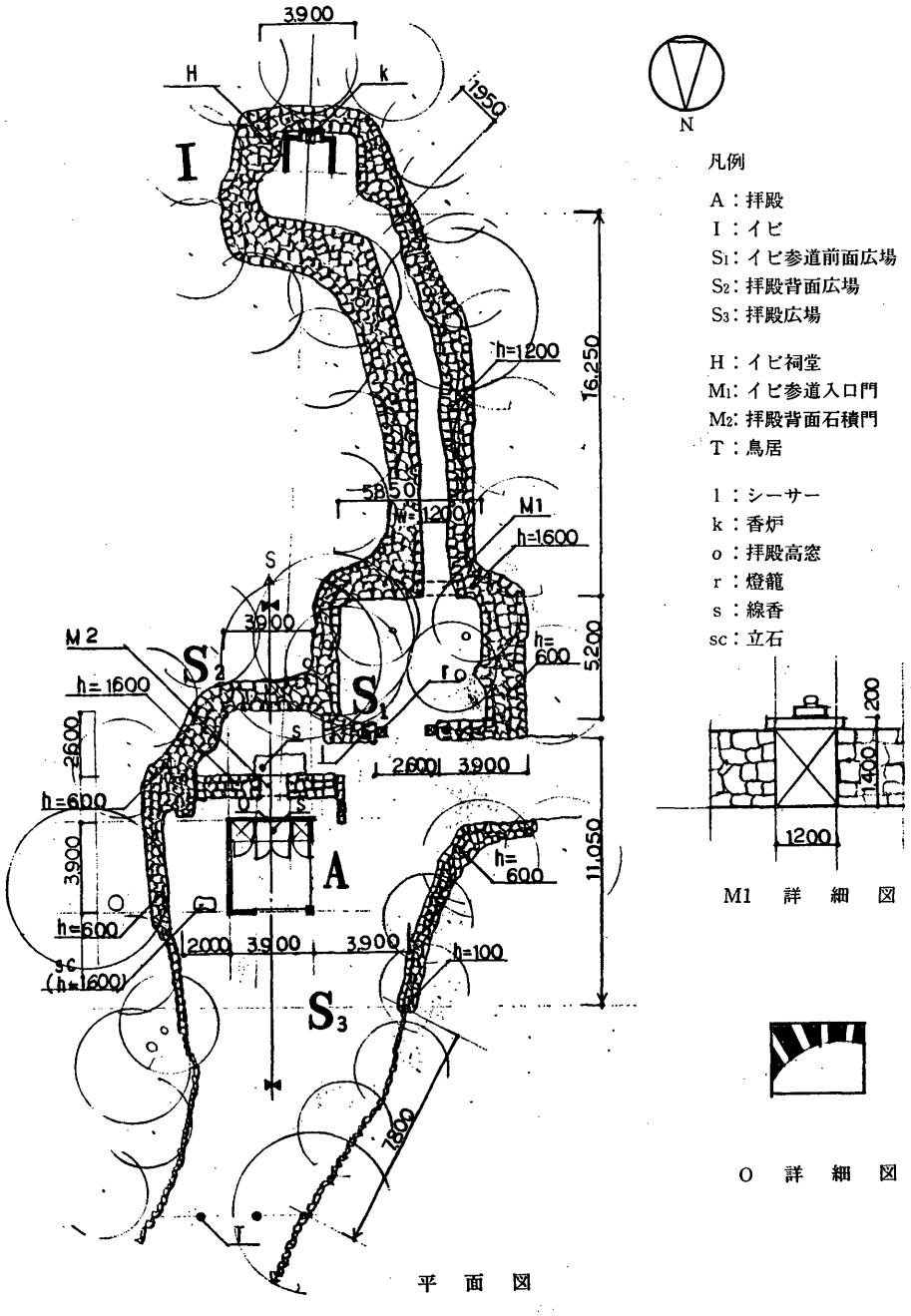

3900
H
k
1950
I
N
凡例
A：拝殿
I：イビ
S1：イビ参道前面広場
S2：拝殿背面広場
S3：拝殿広場
H：イビ祠堂
M1：イビ参道入口門
M2：拝殿背面石積門
T：鳥居
l：シーサー
k：香炉
o：拝殿高窓
r：燈籠
s：線香
sc：立石
h=1200
16,250
5850
W=1200
M1
h=1600
S
3900
M2
S2
h=1600
2600
h=600
S1
r
5,200
2600
3900
h=600
A
3900
h=600
2000
3900
3900
h=100
sc
(h=1600)
S3
11,050
7800
T
1200
1400
1200
M1 詳細図
O 詳細図
平面図

図18 南風保多御嶽

mの小さな広場になっていて，西側からの進入口以外は高さ60cmの石積みで囲まれている。拝殿の基軸から西へ5mずれた位置に燈籠が，入口の左右に置かれ，さらに石垣の上に，シーサーの置かれたイビ参道入口前の広場がある。間口×奥行は約6m×約5.2mで，石垣の高さは60cmから1.6mと，奥へ行くにしたがって高くなっている。広場の奥参道入口の門は幅1.2m，高さ1.4mで，門の上部に宝珠をのせた平板石がある。イビへの道は幅1.2mで，両側が1.6mから1.2mの石積みで，石垣の幅も広い。参道からイビまでは逆時計回りで約18m，4m角のイビにはコンクリート造の祠があり，その奥の南側の壁は掘り込まれ，その内部に香炉が2個置かれている。

この南風保多御嶽や迎里御嶽のような二つのゾーンをもつ御嶽は，御嶽の発展や変遷を考える上で興味深い。

2. 聖域の地域的類型分析

御嶽にイビが発生したのは，神骨のある墓や洞窟，磐座とされる巨大な岩盤や鐘乳石，特異な地形，その他部落に豊穣をもたらすとされる特定の場所などの，場所の認識が重要な契機になっている。これらの場所は，沖縄の人びとの他界観や世界観となんらかの意味的な連関がある。筆者が現地で見た多くの聖域の空間的特質は，依代や物の配列，構成が，特定の場所を超えた奥へと方向づけられていることであった。その意味で，イビは水平・垂直の遙か彼方の世界との物理的境界もしくは接点ともいえる。

聖域は，その成立期において，定位された場所と通路のみの単純な建築形態をとったように思われる。次の段階に，徐々に機能的に空間の分節化が計られ，構造化される。イビと前面広場の構成が，それである。空間的には，1領域2分節化の構造が生まれる。この形式は，現在の御嶽の基本形式になっている。

古形をとどめている御嶽には，沖縄本島では辺戸のクガニムイ，知念村の斎場御嶽，宮古では大神島の東御嶽，狩俣の大城御嶽，八重山では波照間島の真徳利・阿幸俣・白郎原御嶽などがある。いずれの御嶽も，1領域未分節の姿をとどめている。

沖縄本島北部地域の御嶽は，主として距離または高低差によって空間分節が行なわれている。このことは地形的特質にもよる。イビとイビヌ前，イビヌ前の広場と神アシアゲのある広場との間には，参道または地形的断絶があって，視覚的に別の領域になっている。他方，南部の首里地域では，石積み門の物理的・象徴的隔離によって構造化が進んでいる。

宮古島の御嶽は，低い石積みで囲われた小さなイビとそれに接して設けられた石積みの籠り屋とからなる1領域構成で，籠り屋は独立した閉鎖的な空間である。祭祀家屋は仮屋から恒常的な建築物になったもので，宮古の籠り屋は，本来，祭祀の際，人から神へ，神から人への変換にかかわる施設であった。

八重山の御嶽は，イビ領域と広場領域が石垣門によって視覚的に二分化されたものが多く，形態的に整っている。イビが香炉の置かれた部分と中イビに2分節化され，内部の標示も明確である。他方，広場は機能に応じて，その領域をさらに2分節，3分節化されている。神を迎え祭るための神聖な場を標示・区画する迎神施設として人為的に設けられたものと特徴づけることが出来よう。以下，地域別にその形態を検討してみよう。

1)　沖縄の御嶽形態

立地の場所は，部落を中心とした山や海岸線の小島，川を隔てることによって，他の領域（他界）の認識が反映されている。事例5は海，事例2・3は川を隔てている。事例10は山中型である。

イベの形式は，洞窟型（事例5・6）と磐座型（事例2・8），樹木型（事例1・8），墓型（事例3・4）の四つの類型に分けられる。大岳の山頂形式の場合を含めると類型は五つになる。その他，具体的対象物が存在しない形式もある。しかし，これらの形式は複合して存在する場合が多く，分類することはむずかしい。

御嶽の構成軸は原則として1軸であるが，イビの拝み軸と大きなずれのある場合がある。事例1・2は 90° 方向にずれていて，聖域が発生した時期の拝む方向が，その後の聖域構成の発展によって，意図的にずれたのか，あるいは地形上の理由によるのかは将来，改めて考察する必要がある。一般的に沖縄における聖の方角は古くは北，玉朝成立後は東とされているが，西海岸では北軸方向の御嶽が多く見られるが，東海岸では南東方向軸の御嶽が多い。

御嶽の形態的構造としては，宮城真治の「沖縄本島山原の御嶽模式図」がよく知られている [宮城　1953: 22]。宮城の図式に近い事例は事例1・4であろうが，宮城の述べたすべての条件や構成要素を筆者が調査した事例から見い出すのは困難である。イビ領域は，単純な構成で大きな変化はないが，小祠が設けられるなどの変遷御嶽のがある。イビ領域標示の左縄が締められた事例4は，広場とイビが同一平面にある場合，その空間的分節を標示している。イビは一般的に視覚的に開かれているが，イビヌ前からの距離的隔離や垂直的高低差によって視覚的に区分されている。その具体的

な例として事例1・2・10がある。北部地域におけるイビへの道は，事例1・2が示すように，時計回りに進入する事例が多い。

2) 宮古の御嶽形態

宮古島は平坦な地形のため，小高い岡や海岸近くに設けられた御嶽が多い。また，上野町や下地町の御嶽は海との関連性が強い。

イビの形式は，豊穣信仰と結びついたビマル御嶽の洞窟型や磐座型（事例13），喜佐真御嶽の墓型，樹木型（事例11）などがある。イビの形態特徴としては香炉の置かれた場所の背部に馬締形の石積みが挙げられる。事例13・15をはじめ，狩俣の大城御嶽，宮国のミガガマ御嶽，来間島のアカズイ御嶽などに，こうした特徴が見られる。この石積み馬締形は，領域標示の境界を示す人工的なものであろう。狩俣の拝所（事例12）のイビの形態は，石積みの背面に香炉の置かれた開口部をもつ。また，城辺町のキャーギ神殿御嶽にもアーチ状の小さな門があって，いずれも通うし御嶽的性格をそなえている。

イビと広場の配置は1軸構成のものが多い。沖縄本島にみられるような線状的展開の形式が少なく，1領域の空間として意識されている。宮古島の北部・東部の海岸では，北東方向軸の御嶽が多いが，南部・西部の海岸では南方向軸の御嶽が多い。このことは，海上から来訪する神観念と関連しているように考えられる。

宮古の御嶽の特質は，沖縄の御嶽ほど地形に左右されていない。また，八重山の御嶽ほど形態的隔離が強くない。その構成は単純であるが，空間的にきわめて優れていて御嶽の祖型を残している。事例11・12・13・15の御嶽には籠り屋があるが，特に事例12の島尻・狩俣の籠り屋は祖型的特徴を残しているように思われる。その他にも城辺町のウィピアー御嶽のウイウス・クシウィピアー・マイウィピァーの三つの籠り屋は貴重な資料である。イビと籠り屋の結びつきや籠り屋の空間的特質は，宗教的空間における閉鎖された空間の意味を考える上で重要な手がかりになる。

宮古では，イビと籠り屋とは意識のレベルにおいて一体化した構造になっている。イビと広場との分節点としての小さな門（開口部）は，人間が進入するためのものというより，むしろ視覚的接合としての機能をそなえている。事例12や城辺町のキャーギ神殿御嶽，下地町の渡真利御嶽，喜佐真御嶽，マヤー御嶽などに，こうした門をみることが出来る。

3）八重山の御嶽形態

御嶽の立地は，石垣島ではその多くが部落と海岸との中間に位置する。竹富島や黒島，波照間島の御嶽も海岸線の近くに設けられている。これは，部落が島の中心に位置るためであろう。波照間島では，南海岸にあるピティヌワーと部落内のウツヌワーとが親子の関係にあるといわれ，二重構造になっている。小浜島の御嶽などは，移動して村内に集中している。

イビの形式には，依代を中心として構成される場合のほか，イビの場所を人為的に区画し，標示する形式がある。事例19は2本のイベ木を中心にイビが成立している。事例1や小浜島の嘉保根御嶽，川田・照後御嶽，石垣の美崎御嶽，竹富島の久間原御嶽のイビにも聖木がある。波照間島の白郎原御嶽には巨大な垂直の洞窟がある。これは洞窟型の御嶽で，磐座型としては石垣の潤水嶽や仲嵩御嶽，黒島の南神山御嶽，竹富島の幸本御嶽，真知御嶽などがある。墓が御嶽となっている例として，黒島の北神山御嶽，小浜島のナカンドゥーワン，石垣の真乙姥御嶽がある。イビを取巻く石垣や標示石には，円形または楕円形，半円と直線の組み合せのものが見られ，円の中心や石垣に接して香炉が置かれている。竹富島では，イビ領域がイビ（ウブ）と中イビとに区別され，中イビが拝殿からイビへの参道という形をとっている。さらに香炉の置かれたイビは基準構成軸からはずれ，北か東の方向に空間的な脹らみをもっている。黒島の御嶽（事例20）は拝殿から小祠のあるイビまでの距離が長く，島の南部にある御嶽は逆時計回りの参道を進入する方式をとるが，島の北部の御嶽は時計回りの進入方式をとる。

八重山の御嶽の形態は地域ごとにいくつかの差異がある。仮に事例16・17を石垣北部型，事例18を竹富型，事例19を小浜島の2香炉形式の御嶽，事例20を黒島型と呼んでみよう。

石垣北部型は，赤イロ目宮鳥御嶽や浜崎御嶽の川平地区によって代表される。全域がイビ―石垣門―拝殿―鳥居の1軸構成である。この型には，拝殿が広場の中心に位置する型と拝殿がイビの奥の香炉から鳥居までを含めて中心に位置する型とがある。事例16は前者，事例17は後者である。構成軸は北と東(事例16)，北西と一定していない。石垣南部型には，宮良地区の小浜御嶽や山崎御嶽のように，イビを円形に石積みし，拝殿との間に石積み門をもつ形式がある。大浜や宮良，白保では，拝む方向が北軸と東軸との間に設定されている。

竹富島の御嶽の形式は構成原理が同じで，構成軸は1例を除き，すべて北または北

東の方向である。イビの香炉が置かれた場所は拝む方向に拡がり，事例18などは 45° 構成軸より東の方向になっているが，その他の御嶽では，拝む方向が 90° 直交方向東にずれている。こうした構成軸と拝む方向とのずれは，聖なる方向の歴史的変遷を意味するのか，あるいは別のことを意味するのかは将来の課題となろう。ここでは，竹富島の御嶽に北を優位，南を劣位，または右を優位，左を劣位とする構成原理が垣間見られることを指摘しておこう。小浜島では合祀されている2香炉形式の御嶽と1香炉形式の御嶽がある。いずれもイビの香炉数と拝殿内の神棚の香炉数とが一致している。また，両者はイビの香炉と石積み門入口，拝殿のイビへの出入口が1軸線上にあって，軸方位は東または北東である。事例19は直線状の石積み門であるが　他の御嶽は石積みが楕円形にイビ領域を高さ 1.2m から 1.4m で取り巻き，その一部が突出した門になっている。

黒島には『琉球国由来記』に記載された八つの御嶽のうち，東筋部落を中心にした北海岸に4カ所，南海岸に4カ所ある。事例20は南海岸型のもので，そこでは構成軸が南または南東の方向になっている。他方，北海岸では軸が北または北東の方向で，南・北海岸とも海方向軸をとっている。空間の展開が南海岸では逆時計回り，北海岸では時計回りである。事件20をはじめ，南海岸にある御嶽はイビ領域と拝殿を含む領域が1軸構成ではなく，2軸構成または意識的に曲げられたイビへの進入口方式をもつ。南神山御嶽は極端な例で，拝殿からイビへの進入方向と鳥居から広場への参道方向が 180°，1回転している。黒島の御嶽の構造は，その進入方式の回転運動性という点で，他地域では見られない独自性があるといってよいだろう。

む　す　び

以上，聖域の実測調査資料に基づいて，沖縄・宮古・八重山の20事例について，その依代，イビの形式，拝む方位，配置構成の基準軸，空間領域の分節形態について検討してきた。表1・2は，それを整理したものであるが，つぎの諸点を指摘して本稿のむすびとしたい。

1.　聖域の立地は，沖縄本島では空間的に不連続な地形条件を利用して，聖域を俗域から隔離する方法をとる例が多い。宮古・八重山の聖域は，村落と海岸線との間に位置し，聖なる方角に向かって設けられている。

2.　イビの形式は，洞窟や巨石を依代とする磐座型，イベ木を依代とする樹木型，骨神が祭られる墓型，山頂そのものを依代とするものなどが見られるが，これらの形

表1　聖域事例名と『琉球国由来記』記載の御嶽名との関連表

事例	聖域名	『琉球国由来記』御嶽名	神名	イビ名	祭神の性格
1	ウガミ	シチャラ嶽	スデル御イベ	—	—
2	イビヌタキ	幸地嶽（？）	アカシニヤノ御イベ	—	○
3	ヌーガミ	ヤギナハモリ城	カネマシノ御イベ	—	○
4	ウイグスク（ウフグスク）（ナカグスク）	小城嶽	大ツカサナヌシ	—	○
5	ミーウガン	アラサケ嶽（？）	マワジノ御イベ	—	●
6	島の川御嶽	饒平名嶽	アフヤマ中森之御イベ	—	○
7	安谷川嶽	安谷川ノ嶽	—	—	—
8	内金城嶽（大嶽）	内金城之大嶽	カネノ御イベ，ヌノ名モジヨルキヨノ大神	—	—
	（小嶽）	内金城之小嶽	イベツカサ御セジ	—	—
9	拝所グスク	—	—	—	—
10	大嶽	スズキヨ御嶽	トモヨセ	—	●
11	ウパルス御嶽	池間御嶽	オラセリコタメナフノ真主	—	○
12	島尻・狩俣の籠（島尻）り屋	島尻御嶽	マヒトマラツカサ	—	○
	（狩俣）	—	—	—	—
13	タケナカ御嶽	—	—	—	—
14	赤崎御嶽	赤崎御嶽	大世主豊ミヤ	—	●
15	石城御嶽	石城御嶽	アカシセド弓取真主（男神）	—	○
16	赤イロ目宮鳥御嶽（アーラオン）	赤イロ目宮鳥御嶽	嶽名＝同ジ	マカコ大アルジ	○
17	浜崎御嶽（キファオン）	浜崎御嶽	嶽名＝同ジ	ゲライ大アルジ	●
18	花城御嶽（ハナスコオーン）	花城御嶽	豊見ハナサウ	イヘスシヤカワスシヤ	○
19	サクヒ・仲山御嶽（サクヒ）	サクヒ御嶽	サクヒ神花	マカコ大アルジ	○
	（仲山）	仲山御嶽	嶽名＝同ジ	モモキヤネ	○
20	南風保多御嶽（パイフタオーン）	ハイフタ御嶽	阿宇慶山	エラビヲタイ大神	○

凡例　○：祖霊神を祭る御嶽・その他
●：ニライ・カナイ神を祭る御嶽
（祭神の性格については，宮城栄昌・高宮廣衛編 1983：60-61 による。）

表2　聖　域　の　建　築　的

事例	聖　域　名	イビの形式と依代	構成基準方位	イビ拝み方向
1	ウ　ガ　ミ	イベ木	S–N	W
2	イ ビ ヌ タ キ	磐座　イベ岩	NNE–SSW NNW–SSE	SSW
3	ヌ　ー　ガ　ミ	石積み墓	SW–NE	SE, NE
4	ウ イ グ ス ク　(ウフグスク)	左縄　窪　地	W–E	E
	(ナカグスク)	左縄　蒲葵林	——	N, E
5	ミ ー ウ ガ ン	磐座　洞　窟	SE–NW	NE
6	島 の 川 御 嶽	磐座　洞　窟	——	——
7	安　谷　川　嶽	磐境　—	W–E	E
8	内　金　城　嶽　(大　嶽)	磐境　イベ木	SW–NE	NE
	(小　嶽)	磐境　陽　石	S–N	N
9	拝 所 グ ス ク	——	SSW–NNE	N (神女) S (村民)
10	大　嶽	山　項	S–N	N
11	ウパルス御嶽	イベ木	——	——
12	島尻・狩俣の籠り屋　(島尻)	——	W–E	——
	(狩俣)	磐境　——	SW–NE	NE
13	タケナカ御嶽	霊　石	N–S	E
14	赤　崎　御　嶽	磐境 左縄　——	N–S	S
15	石　城　御　嶽	磐境 左縄　——	S–N	N
16	赤イロ目宮鳥御嶽(アーラオン)	磐境　イベ木	W–E	EEN
17	浜　崎　御　嶽　(キファオン)	——	SE–NW	NW
18	花　城　御　嶽　(ハナスコオーン)	磐境　——	S–N	NE
19	サクヒ・仲山御嶽　(サクヒ) (仲山)	イベ木	W–E	E
20	南風保多御嶽　(パイフタオーン)	磐境　——	N–S	S

凡例　{　}：領域単位記号
〔　〕：空間分節単位記号
(　)：場所の構成要素
I：イビ
S：広場（庭）
A：祭祀家屋
ai：イビヌ前からイビへの進入路
a：参道
領域記号，分節記号に g, G, nw が付けられた記号は，その領域を限定標示する特性を示す。その他の要素記号は付図1から18の記号参照。

構成分析表

構成要素及び領域分節	形態的類型
$\{[I(i, k, s)]-ai\}-S(t, k, r, h)-a$	沖縄北部型
$\{[I(i, H(k))]-ai\}-S(n(k), r, p, h)$	沖縄北部型
$[I(g, Tb)]-S[S_1(A(k), k)-S_2-S_3]-a(T)$	沖縄北部型
$\{[I_1(Tb)]_{nw}-S_1(k)\}-S_2(k)$	沖縄北部型
$[I_2(Tb, i)]_{nw}-ai(H(k), k, t)-S_3([A], c, H(k))$	
$[I(y, k)]-ai$	——
$[I(y, k)]-ai$	——
$\{I(k, g)\}-M-S(k, t)$	首里型
$[I_1(i)]_g-M_1-S(k)$	首里型
$[I_2(y)]_g-M_2-S(k)$	
$S([H(k)], j, [\overrightarrow{ai}])-a$	——
$S([H(k)], j, [\overrightarrow{ai}])-a$	山頂南部型
$\{I(i, k, kt, g)-S([A_1], [A_2], H)\}-a(T_1, T_2)$	宮古型
$\{[A_1]-S-[A_2]\}-a$	——
$\{[I(M(k))]_g-S([A], [\overrightarrow{ai}])\}-a$	宮古型
$\{I(i, k)-ai\}-S(g, k, [A])-a$	宮古型
$\{[I(H, k)]_g\}_{nw}-S([\overrightarrow{ai}])-a(T)$	——
$\{I(k, g)\}_{nw}-S([A], k)$	宮古型
$\{I(i, k)\}-M-S\{[S_1(y)]-S_2([A(k)])-S_3(T)\}$	石垣北部型
$[I(g, k)]-M-[S(k, [A(k)], T)]$	石垣北部型
$\{[I(k, g)]_g\}_G-\{[A(k)]-[S_1]-[S_2]-[S_3]\}_g-a(T)$	竹富型
$\{[I(i, k)]-M-S_1([A(k)])\}-a(T)-[S_2]$	小浜2香炉型
$\{[I(H(k))]-ai(M_1)-[S_1(r, l)]\}_G-S\{[S_2(s)]-M_2-S_3([A(s)], sc, T)\}$	黒島型

式は複合して存在する。

3.　北と東が方位的に優位とされ，このことが御嶽の構成軸にも，反映している場合がいろいろ見られるが，なかには南や西の方角をとる例もある。

4.　聖域の配置構成は原則として1軸である。しかし，構成軸とイビの拝む方向には直交するような軸がある例もある。この点は今後，改めて検討する必要があろう。

5.　イビに入る形式として，俗から聖への接近が認められ，これが左右の優劣という形をとって現れている。また空間的には時計回りと逆時計回りに展開されている。

6.　聖域は空間的距離によって分節化したものが古く，沖縄北部型の御嶽や宮古島北部地域，波照間島の御嶽がこれにあたる。

7.　八重山・石垣島の御嶽は比較的新しい形態と考えられる。その平面構成には，建築的構成規範とみられる3種類の型がある。一つは拝殿が広場の中心に位置する型，いま一つは，イビの奥の香炉から鳥居までが全域の中心に位置する型。もう一つはイビと広場の領域がほぼ同じ大きさで，それぞれの中心にイビの石垣と拝殿があって，イビと拝殿の同距離の所に石積門が位置する型がある。なお，川平の赤イロ目宮鳥御嶽には，平面構成に整数倍列の秩序が見られる。

8.　御嶽の形態類型は，沖縄本島には距離分離法をとる北部型や石垣の門をもつ首里型，山頂を依代とする山頂南部型がある。宮古にはイビと籠り屋が一体となった型が，八重山には川平の石垣北部型や宮良の石垣南部型のほかに，竹富型，黒島型，小浜1香炉型，小浜2香炉型がある。

謝　　辞

この報告は，国立民族学博物館の共同研究「奄美・沖縄の宗教的世界」(代表　伊藤幹治）の研究会で発表した「御嶽の形態と空間について」(1984年12月14日）および「聖域空間の把握方法とその類型論的分析」(1985年9月27日)，1983年度トヨタ財団第2種研究助成研究報告書『南西諸島の聖域における宗教空間の研究』の一部を補充修正したものである。なお共同研究協力者として発表することを勧めていただいた琉球大学短期大学部教授比嘉政夫先生，草稿に目を通して貴重な助言を下さった国立民族学博物館教授伊藤幹治先生，その他貴重な意見を下さった共同研究員の方々に深く感謝を申し上げる。

文　　献

宮城栄昌・高宮廣衛編
1983　「御嶽の分布―『琉球国由来記』による―」『沖縄歴史地図　歴史編』柏書房 pp. 60-61。
宮城真治
1953　『古代の沖縄』新星図書。
名護市教育委員会
1979　『名護市の御嶽林』。
仲松弥秀
1975　『神と村』伝統と現代社。
1983a　「御嶽」沖縄大百科事典刊行事務局編『沖縄大百科事典上巻』沖縄タイムス社 p. 294。
1983b　「島人の信仰と御嶽」宮城栄昌・高宮廣衛編『沖縄歴史地図　歴史編』柏書房 p. 131。
沖縄県教育委員会
1978　『沖縄県社寺・御嶽林調査報告』Ⅰ。
1979　『沖縄県社寺・御嶽林調査報告』Ⅱ。
1980　『沖縄県社寺・御嶽林調査報告』Ⅲ。
1981　『沖縄県社寺・御嶽林調査報告』Ⅳ。
1984　『御嶽―御嶽信仰習俗分布調査(Ⅰ)―』。
1985　『御嶽―御嶽信仰習俗分布調査(Ⅱ)―』。
鳥越憲三郎
1965　『琉球宗教史の研究』角川書店。